

聖徒の道

12
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年12月号



表紙——「見よ、〔博士ら〕が東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。」(マタイ2:9)この作品をはじめ、フランスの芸術家ギュスターブ・ドレ(1832—1883年)作の木版画には、救い主の生涯から取った様々な情景が描かれている。(本誌「キリスト——その降誕とみ業」pp. 16—23参照)

裏表紙には、キリストの降誕を描いたドレの版画と共に、世界各国の言葉で、クリスマスのあいさつが記されている。

こどものページ表紙——写真撮影スチーブ・ブンダーソン

一般

大管長会クリスマスメッセージ	1
大管長会メッセージ——「人々にもそのとおりにせよ」 第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー	2
「私は家族と共に過ごした」夫、父、息子、兄弟としての ジョセフ・スミス プレント・L・トップ	8
キリスト——その降誕とみ業 ギュスターブ・ドレの木版画	16
ベトナムでのクリスマス ジョン・L・マイゼンバック	24
監督として迎えた最初のクリスマス マービン・K・ガードナー	26
もう一度、愛を込めて リベカ・ストランド・ルソン	40
キリストの降誕を証する人々 ジョセフ・フィールディング・マッコンキー	42

青少年

本当の贈り物 リベカ・ラッセル	32
モルモンコーナー ラリー・A・ヒラー	34

定期特別記事

家庭訪問メッセージ——喜びに満ちた奉仕	25
---------------------	----

こども

新約聖書カレンダー シャウナ・M・カワサキ	2
予言者ジョセフ・スミス——子どもの友だち スーザン・アリングトン・マドセン	4
歌 サムエルのよげん	7
分かち合いの時間——「こはわがあいしなり」 バージニア・ピアス	8
喜びのおとずれ メアリー・リグゾー・ハール	10
クリスマスの手作り教室——手作りのおくりもの	13
クリスマスメッセージ 大管長会から世界中の子どもたちへ	14

聖徒の道

1992年12月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・ディアイエ、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー

教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：プライアン・K・ケリー

編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐/こどものページ：ディエーン・

ウオーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ

アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン

デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・デイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・バンスタブレン

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1992年12月号第36巻第12号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布 5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約 2,200円(送料共)

半年予約 1,100円(送料共)

普通号 150円, 大会号 350円

Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年3月 翻訳承認—1991年3月 原題—International Magazine. December 1992. Japanese. 92992300.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

大管長会 クリスマスメッセージ

すべてのキリスト教徒と共に、祝福に満ちたクリスマスの季節を喜び迎えたいと思います。この時期、私たちの思いは、神の御子イエス・キリストに向けられ、その誕生を祝います。私たちは主を愛し、

主をたたえ、すべての人々に主のみもとに来ようお勧めします。

主は完全な生涯を送られ、御父のみこころのままに人々の罪を贖われた唯一のお方です。主がお生まれになった時、天使らが歌声を響かせ、新しい星が現われ、博士たちが注目し、予言者たちが喜んだのは、少しも不思議ではありません。主の福音は、愛のメッセージなのです。

大いなる愛と憐れみをもって、次のような慰めの祝福を残して下さったのは、まさに主でした。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14:27)

この聖なる季節にあって、主を尋ね求めるすべての人々に平安と慰めの祝福が注がれますよう、へりくだってお祈りいたします。また、新たに迎える年が喜びに満ちた年となり、皆さんが御子の生涯に倣って、神の戒めにさらに従順となれるよう願っています。□



「人々にも そのとおりにせよ」

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

キリストの降誕に思いをはせるすばらしい季節がやって来ました。この出来事について記された言葉は、聖典の中ではわずかな部分にすぎません。しかしながら、これらの簡潔な言葉は、至る所の人々に幾千年にわたって希望と敬虔^{けいけん}の念をもたらしています。

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。」(マタイ 1:18) マタイはこのような言葉で話を始めています。

マルコは、力強く証を述べることから始めています。それは「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」(マルコ 1:1) という証です。

ルカは救い主の生涯について次のように述べています。「わたしもすべての事を初めから詳しく調べています……。」(ルカ 1:3) これに続いてルカは、マリヤとヨセフがナザレからベツレヘムへ旅をすることとなった背景について簡潔に、しかも美しく物語っています。野宿をしながら羊の群れの番をしていた羊飼いたちのこと、そして「客間には……余地がなかった」(ルカ 2:7) ため主が馬小屋でお生まれになったこと、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。



救い主の誕生を祝うとき、愛のこもった態度でご自身のみもとに幼な子たちを集めておられる主の模範が思い起こされる。主は私たちも同様に全人類をご自身のみもとに集める助けをなすよう望んでおられる。

きょうタビデの町に、あなたがたのために救主すくいぬしがお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」(ルカ2:10-11)と宣言した天使のことなど、ルカは実にすばらしい言葉を記しています。

ヨハネは、前世における救い主と、その創造主としての役割について宣言し、その物語を始めています。

「初めに言ことばがあった。言は神と共にあった。言は神であった。

この言は初めに神と共にあった。

すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。……

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」(ヨハネ1:1-3, 14)

これらは、主と共に歩んだ証し人たちの証であり、彼らの言葉は主なる救い主、イエス・キリストについて記した新約聖書となりました。

福音を記した書物が、さらにもうひとつあります。それは新世界に関する聖典です。この聖典では、永遠の御父がみ声をもって、復活された主を西半球の信仰深い人々に紹介しておられます。「わが喜ぶ愛子あいしを見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」(Ⅲニーフアイ11:7)

神ご自身によるこの紹介の言葉に続いて、復活された主が降りて来られ、人々の中に立ち、こう言われました。「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世よに来ると証をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。」(Ⅲニーフアイ11:10-11)

これらの様々な証の言葉に加えて、最後の神権時代の予言者ジョセフ・スミス——彼が生まれたのもこの12月でした——は、次のように証しています。

「^{しか}して、われら御父の右に御子の栄光を見、その無上完全なるものを受けたり。……

さて、この子羊つばねに就きて為なされたる様々の証の挙句、われらの為なす最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子ひとりこなりと証したもう声を聞けり。」(教義と聖約76:20, 22-23)

これらすべての証に、私たち大管長会も自らの証を付け加えたいと思います。イエスはまことにキリストであり、御父の長子であり、天と地の創り主、古代イスラエルのエホバであり、ユダヤのベツレヘムいやにお生まれになった約束のメシヤです。また、病を癒してくださるお方、福音を説かれるお方であり、世の贖あがない主、救いの源、神の右に座する復活された主であり、私たちが神に祈るとき、そのみ名において仲立ちとなってくださるお方です。

主は言われました。「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。」(ヨハネ14:21)

従順によって主への愛を示す人々にとって、このみ言葉は、実に栄光に満ちた約束です。ここで、最もよく知られていながら、おそらく最も守られていない主の戒めのひとつに触れたいと思います。それは黄金律として知られているものです。

イエスは言われました。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)

このクリスマスの時期にあつて、皆さんに思い起こしていただきたいと思います。私たち一人一人が、キリストから与えられたこの戒めにしばしば思いをはせ、それに従おうと努めさえすれば、世界は一変します。家庭はさらに幸福なものとなり、隣り人との間には思いやりが増し、訴訟は激減し、見解の相違を解決するために大きな努力が払われることでしょう。そして、愛と感謝、尊敬の気持ちがさらに高まるでしょう。

また、寛大さ、思慮深さ、思いやりが増し、平和の福音を宣べ伝え、神の子供たちの間に救いのみ業を推し進めようとする思いに満たされることでしょう。

しばらく前のことになりましたが、私は1通の手紙をいただきました。差し出し人の兄弟が快く承諾してくださったので、ここに引用したいと思います。

「拝啓 1時間ほど前、私は、この手紙を書くように促す、非常に特別な経験をしました。自宅に向かって歩いていると、急に思いがわいてきたのです。あらゆる面でふさわしいにもかかわらず、伝道資金が足りなくて困っている若者がどこかにいて、私はその若者に必要

な伝道資金を提供すべきであるという思いでした。私には彼がどこのだれだか、まったく見当が付きません。しかしシンクレ副管長ならご存じなので、副管長の元に送金し、その若者が伝道に出られるようにすべきだという否定し難い気持ちにかられたのです。気がつくとは私は涙を流していました。家に着くと、たった今経験したことを妻に話し、どう思うか尋ねました。もちろん彼女は同意してくれました。

3,000ドルの小切手を同封しますが、私の心に浮かんでいる金額は、4,000ドルなのです。これは今の私たちが用立てられる限りのお金です。しかし1月27日には、あと1,000ドルの小切手を送付します。私はまだ研修期間中の医者であり、妻と3人の娘を養っていくため、人一倍働かなければなりません。家を買う頭金がないので、そのために5年間貯金を心がけてきました。そして主は、計り知れない祝福を与えてくださいました。

実は、3年前にも同じような気持ちを感じました。しかし、私たちはその気持ちについて考えた時、主から求められるものを捧げる備えをするようにという合図を、主が送っておられるのだと思いました。それで私たちは、私の研修が修了したら、家計が許す限り、ひとりでも多くの宣教師を援助しようと決心していました。そして今晚、確かに主は、私たちにそのお金を捧げるように望まれたのです。

私は教会への改宗者です。……妻は教会員の子供として、神聖な誓約の下で生まれました。私は13年前に、レバノンの故郷ペイルートを離れました。11歳の時から真

の宗教を見いだすことを夢見ていました。そして15年後、やっと見つけたのです。私は子供のころ、危うく死にかけたことが一度ならずありました。しかし、そのたびに神のみ力によって救われてきました。

アメリカに来た時、……アメリカ国民でないというだけの理由で、医学校から入学を許可される望みはありませんでした。しかし内なる声が、いつの日か自分は医者になれるとささやいていました。

やがて私は奨学金を受けて、合衆国でも屈指の医学校に入りました。その後、別の医学校に通うことになりましたが、その時はどうしてそうしたのか自分でもまったくわかりませんでした。……1年後、不思議な方法で教会のパンフレットを手に入れ、教会に入りました。それから9カ月後に妻と出会い、初めて会ってから3カ月たった時、神殿で結婚しました。

このように、私は主に対して4,000ドル以上の負債があるのです。主は私に、働いて生計を立てるための健康な体も与えてくださいました。

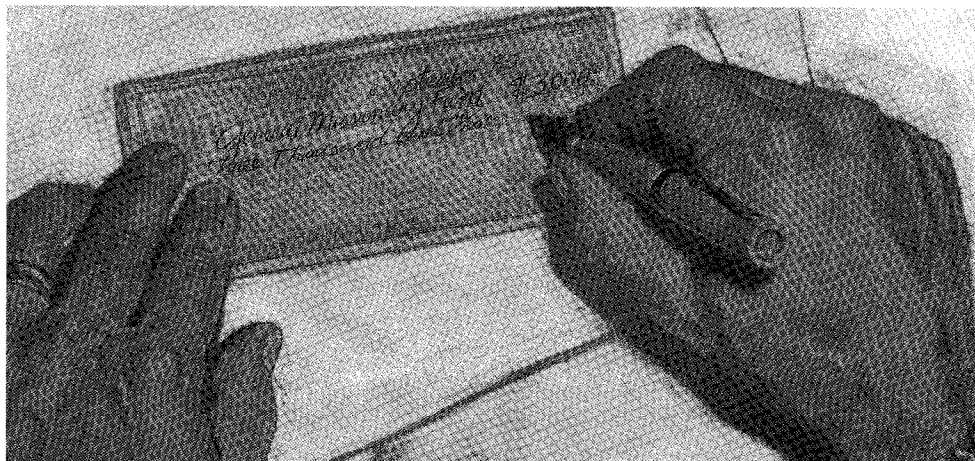
私たちは、……このお金を副管長に託します。教会の指導者として副管長が受ける、主からの靈感に従って用いていただくためです。……この大いなるみ業のために働いておられるすべての人々を愛しています。

神に仕えるすべての人に祝福がもたらされますように願っています。敬具」

手紙は、この兄弟と奥さんの署名で閉じられていました。

この手紙には、私が話すどんなつたない言葉よりもクリスマスの精神が息づき、黄金律の模範が示され、私た

限られた収入にもかかわらず、ある医学生は、宣教師基金に多額の献金を納めることで、自分が受けたたくさんの祝福に感謝するようというみたまの促しを受けた。



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT

スペンサー・W・キンボール大管長は、空港で悲嘆に暮れている若い母親を助け、愛に満ちた奉仕の模範を示した。多くの歳月が過ぎ、キンボール大管長の元に、この親切な行ないに対する心からの感謝を伝える手紙が届いた。

ちすべてのためにいけにえとなって、ご自身の命を捧げられた主の愛が、雄弁に語られています。

黄金律を実践した人をもうひとり紹介したいと思います。すでにこの話をご存じの方も多くいらっしゃるでしょう。20年以上前の冬、イリノイ州シカゴにある広大で繁華なオヘア国際空港での出来事です。この日は激しい嵐のため、飛行機の発着は遅滞もしくは不能となっていました。身動きが取れなかったり、予定を遅らされたりしている数千人の人々は、いらだち、不機嫌で怒りっぽくなっていました。そのような人々の中に、搭乗カウンターの前にできた長い列に並んでいる若い母親がいました。彼女には2歳の子供がいて、母親の足元の汚れた床に座り込んでいました。彼女はもうひとり子供を身ごもっていました。さらに、体調も悪く疲れ果てていました。医者からは、かがんだり、重い物を持ち上げたりしないように注意されていました。そのため、おなかをすかせて泣き叫ぶ子供を足で前に押しやりながら、列の中をゆっくり移動していました。そんな彼女を見ている人々は、批判こそすれ、だれも助けの手を差し伸べようとはしませんでした。

その時、ひとりの男性がこの母親の方に近づいて来て、やさしくほほえむとこう言いました。「大変ですね。お助けしましょう。」彼は、泣いて汚れた子供をやさしく抱き上げ、ポケットからチューインガムを取り出して与えました。ガムの甘さも手伝って子供は静かになりました。その男性は、列に並んでいる人々にこの女性が助けを必要としていることを説明し、彼女を列の前の方に連れて行き、発券係と話してすぐに搭乗できるよう手配したのです。そして母親と子供が心地よく座れる席を見つけ、しばらく話し相手になった後、名前も告げずに人込みの中に消えていきました。こうして、この女性はミシガン州にある自宅への帰途に就くことができたのです。

歳月が流れ、教会の大管長会事務局に次のような手紙が届きました。

「拝啓 キンボール大管長、私はブリガム・ヤング大学の学生です。西ドイツのミュンヘンでの伝道から帰ったばかりです。伝道は素晴らしい経験でしたし、多くのことを学びました。……

先週、神権会に出席していた時のことです。キンボール大管長がシカゴの空港で21年ほど前にされた、愛に満

ちた奉仕に関する話が紹介されました。泣きじゃくる子供を連れ、悲嘆に暮れながら、搭乗券を求めて長い列に並んでいる身重の若い母親に会われないきさつです。彼女は流産する恐れがあったため、幼い子供をあやすために抱き上げることもできずにいました。それまでに4度も流産していて、かがんだり、重い物を持ち上げたりしないよう、医者から念を押されていたのです。

あなたは泣いている子供をあやし、列に並んでいるほかの乗客にこの窮状を説明してくださいました。この愛に満ちた行ないのおかげで、母の張りつめた心は和らげられました。私はそれから数カ月後に、ミシガン州フリントで生まれました。

キンボール大管長の愛に、感謝の気持ちを伝えたかったのです。素晴らしい模範を示してくださいましてありがとうございました。敬具」

私たち一人一人が、頻繁に、また真剣に次の主の戒めについて思いを巡らすなら、この世は、まったく別の世界のようになるでしょう。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)

生ける神の御子、すなわち私たちの教師、王、救い主、贖い主、復活された生ける主の誕生を祝う、このクリスマスの時期にあつて、周囲の人々に良き行ないができるよう、心を尽くして努めようではありませんか。

愛の心が増し、利己心が影を潜め、悲嘆に暮れる人々に助けの手を差し伸べたいという思いと奉仕の精神がさらに高まるこの楽しい季節を通して、神の祝福が皆さんの上に注がれますように祈っています。□

話し合いのポイント

1. 主イエス・キリストの誕生、教えと恵みを施す業、復活、そして末日に地上を訪れられたことの真実性について、明確で素晴らしい証が聖典には記されている。

2. 最もよく知られていながら、おそらく最も守られていない主の戒めのひとつは、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」(マタイ7:12)である。

3. 私たち一人一人が、主のこの戒めを繰り返し生活に取り入れていくなら、家庭や職場、そして世界は一変するであろう。



「私は家族と共に過ごした」

夫、父、息子、兄弟としてのジョセフ・スミス

ブレント・L・トップ

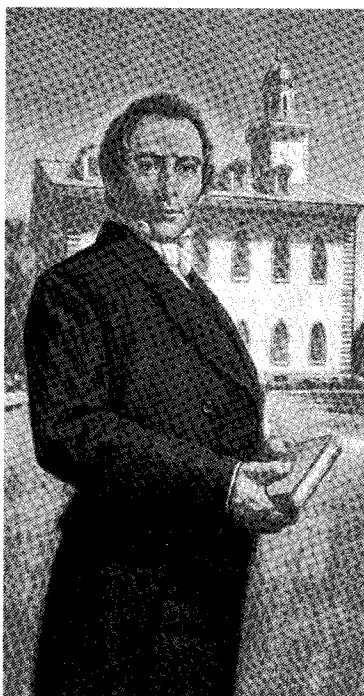
歴代の教会の指導者は家庭を堅固にし、家族の結びつきを強めるように繰り返し教えてきました。デビッド・O・マッケイ大管長はこう言いました。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。」（「大会報告」1964年4月、p. 5）ハロルド・B・リー大管長も次のように教えています。「あなたがた兄弟たちが父親としてできる最大の主のみ業は、あなたがたの家庭の囲いの中にある。」（「大会報告」1973年4月、p. 130）これらの靈感あふれる言葉は、結婚生活と家族の幸福に関する標準となってきました。

現在の予言者エズラ・タフト・ベンソン大管長も、家族のきずなを弱めようとする現代社会の力に対して警告し続けています。最近の大会でもベンソン大管長は、父母、兄弟、姉妹、夫婦そして子供たちに具体的な指示を与えています。

家族に対する愛を深め、家庭での一致を確かなものにするようにという予言者たちの切実な訴えは、20世紀に始まったことではありません。この事実自体、私たちの地上での幸福と永遠の救いを願う天父の計画にあって、家族が永遠の見地から見ていかに重要かを示しています。

回復の予言者ジョセフ・スミスほど、永遠の計画の中で家族生活の占める正しい位置をよく理解していた人はいないでしょう。彼は単に永遠の家族の教義を天から教えられていただけでなく、より重要なことに、この永遠の真理を自分の家族に対して、愛とやさしさ、思いやりを込めた行動で実践したのです。

一時期ジョセフ・スミス宅に寄宿したことのあるベンジャミン・F・ジョンソンは、ジョセフが家族に示す思いやりの模範に強く感銘を受け、後にこのように書いて



います。「息子としてジョセフが両親に示す愛と尊敬の情は非の打ち所がなく、兄や弟としては死に至るまでも愛に満ち忠実でした。また、夫として、父親としてのジョセフの献身は、神への献身を除けば、何よりも家族に向けられていました。」（「ベンジャミン・F・ジョンソンからジョージ・S・ギブズへの書簡」末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部パンフレット、p. 4）

両親に従う

少年時代のジョセフは、「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである」（エペソ6：1）と教え

た使徒パウロの言葉そのままに生活していました。彼は恐れからではなく、深い愛の心から両親に忠実に従ったのです。両親への彼の愛と思いやりは、少年時代のあるエピソードに特によく表われています。ジョセフが足に激痛を伴う重病を患った時のことです。ジョセフは数週間わたって苦痛にさいなまれました。医師たちの必死の治療のいかにもなく、この上は足を切断するほかないという結論に達しました。しかし、ジョセフと母親が強く異議を唱え、医師たちは最後にもう1度だけ手術を試みることに同意しました。彼らはジョセフをベッドに縛りつけることと、痛み止めにワインかブランデーを飲むことを勧めました。母ルーシー・マック・スミスの記録に

ジョセフにとって家族と共にいることが一番の幸せであった。1834年3月27日付の日記に次のように記されている。「家にいて家族と共にとても楽しく過ごした。」



I. BARRETT

よると、その時のジョセフの態度は、父親への信頼と母親への思いやりに満ちたものでした。

『「いやです」とジョセフは叫んだ。『お酒もいらなし、縛られるのもいやです。その代わり、お父さんにベッドの上に座ってぼくをしっかりと抱いてもらいます。そうすれば骨を取るのに必要なことを何でもします。』それから私を見てジョセフは言った。『お母さん。どうか部屋を出てください。ぼくがひどく苦しむのを見てられないでしょうから。お父さんは大丈夫です。でもお母さんは重いぼくを背負ったり、長い看病でくたくたに疲れています。』そしてジョセフは涙にあふれる目で私を見上げて言った。『ねえ、お母さん、出ていくと約束してください。主が助けてくださるからぼくは大丈夫、頑張るからね。』』（ルーシー・マック・スミス「ジョセフ・スミスの生涯」プレストン・ニブレー編、p. 57）

そして、1820年のあの春の朝、若き予言者ジョセフが聖なる経験をして森から戻った時の最初の願いは、新たにもたらされたこの知識、すなわち神の本性と来るべき福音の回復を、家族と分かち合うことでした。3年半が過ぎて、彼が天使モロナイのメッセージを家族に告げた時のことを、母ルーシーは次のように記しています。「私たちは神が、私たちが求めていたもの、つまり救いの計画と人類の救いに関するさらに完全な知識をお与えになるのだと確信した。私たちは大いに喜び、この上なくすばらしい一致と幸福が家にみなぎった。そして私たちの心は平安に満たされた。」（「ジョセフ・スミスの生涯」 pp. 82—83）

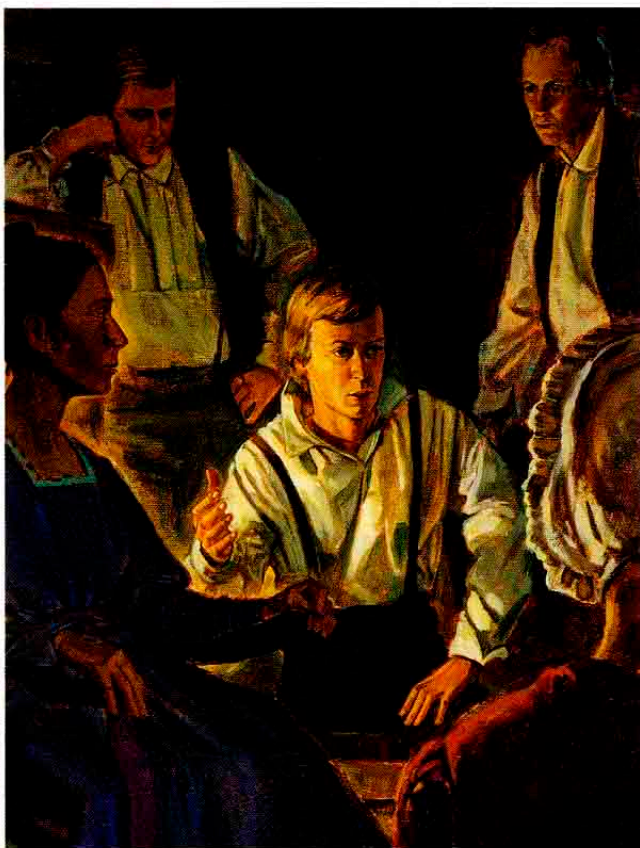
家族へのメッセージ

イエス・キリストの福音の光が豊かに注がれ、福音の原則が実践される時、今日の末日聖徒の家庭もジョセ

フの家庭と同じように、喜びと幸福、平安に満ちた家庭になり得ます。またそうなる必要があります。なぜなら福音のメッセージは家族のためにこそあるからです。

「言葉に言葉を加え、誠命に誠命を加えて」（II ニーフアイ28：30参照）、主はジョセフに、福音は家族を永遠に結び固めるために回復されたことを教えられました。天使モロナイの訪れを受けた翌朝、ジョセフはいつものように父親や兄弟と共に畑仕事に出ましたが、前夜の出来事のため疲労しきって、とても働いてはいただけませんでした。病気だろうと考えた父親は家に戻るように言いました。母親の言葉によれば、ジョセフが途中、りんごの木の下で休もうと立ち止まると、突然、再び天使モロナイの訪れを受けたのです。天使は「父に告げよと言った私の言葉になぜ従わぬのか」と問いました。ジョセフが「父が私の言葉を信じないかもしれないと恐れたからです」と答えると、天使はこうジョセフに約束したのです。「彼はあなたの一言一句を信じるであろう。」（「ジョセフ・スミスの生涯」 p. 79）

ジョセフはそれまでの経験と新しくもたらされた知識を両親に話すようにモロナイに強く諭されました。それらの経験と知識が、彼自身の家族も含めたすべての家族を祝福し、昇栄に導く目的の下に与えられたものだからです。この経験を通して、両親への愛と彼らがいつも自分を支持し続けてくれるという信頼の念が強められたことは間違いありません。ジョセフからモロナイの訪れを聞いた父親は、息子の経験はまさしく「神ごとである」（ジョセフ・スミス2：50）と言い、その信仰を示しました。この父親の態度には、その後若き予言者ジョセフが経験する数々の試練の中で、両親が示し続けた信仰と信頼がよく表われています。



聖なる森での経験の後、若きジョセフは授かった知識を家族と分かち合った。

死の縄目を越えて

ジョセフは愛する両親の信仰と変わらぬ支えを心から大切に思っていました。1835年に、病床に伏す父親のために捧げた熱烈な祈りにジョセフの思いをうかがい知ることができます。「父の健康が快復するように、また父と共にいて助言を受ける祝福にあずかれるように、きょう一日、祈りながら父の看病をした。それは、私が両親と共にあってその長年の経験による健全な助言を受けられる祝福を何にも増して尊重しているからだ。」（「教会歴史」2：289）

予言者、教会の大管長としての責任に多忙を極めていた時も、ジョセフは家族と両親を常に思いやっていました。アブラハムの書の翻訳に再び着手したばかりの1835年10月8日から11日までの日記には、父親への気遣いが書き込まれています。彼にとってはほかのどんな仕事より急を要する一大事だったのです。

「8日、木曜日—在宅。非常に心配しながら父の看病をした。

9日、金曜日—在宅。父に付き添って、世話をした。

10日、土曜日—在宅。父の家を訪ねる。父はどんどん

衰弱していくようだ。

11日、日曜日—病状の重い父の看護をした。朝のひそかな祈りにこたえて主は『わが僕よ、^{しもべ} 汝の父は生き長らえるであろう』と言われた……。

夜になってデビッド・ホイットマー兄弟が訪ねてきた。私たちふたりはイエス・キリストのみ名によって主に熱烈な祈りを捧げた後、父の頭に手を置いて、病に出て行けと命じた。神は祈りにこたえられ、私たちは大いに喜び、心からの充足を覚えた。」（「教会歴史」2：289）

信仰深い父母を愛し、気にかけていたように、ジョセフの兄弟姉妹に対する愛情は死の縄目を越えて続きました。一番上の兄アルビンへの尊敬と心遣いは模範的なものでした。1823年、アルビンは息を引き取る前に、自分が両親のために建てていた家を完成させてくれるようにジョセフとハイラムに懇願しました。そして福音のみ業を世に出すことに終わりまで忠実であるように、ジョセフを熱心に励ましました。（「ジョセフ・スミスの生涯」pp. 86—87参照）ジョセフはアルビンのふたつの願いを忠実に果たしました。1842年8月22日付の記録に、ジョセフはアルビンへの深い敬愛の気持ちを書き記しています。「彼が死んだ時、私の若い心に沸き上がって胸を引き裂かんばかりだった悲しみを、今もよく覚えている。父の子供の中で最も年長であり、立派な人格の持ち主だった。いや、彼は神の子供たちのうち最も優れた者のひとりだった。」（「ジョセフ・スミスの生涯」p. 333）

1836年1月21日、カートランド神殿で示現を見た時のジョセフの喜びは、言葉では言い表わせないほどだったことでしょう。ジョセフは示現で、愛する者たちが「神の日の光栄の王国」にいるのを見ました。こう記されています。「私は父祖アダムとアブラハムを見た。また、私の父と母、この世を去って久しい兄のアルビンを見た。」（日の光栄の王国に関する示現1：1，5）

1841年に弟ドン・カルロスを失った時も、ジョセフは深い悲しみに襲われました。その後のエフライム・マークスの葬儀での弔辞の中で、ジョセフは心からの悲しみを表現しています。「まことに厳粛でつらい時です。これほど厳粛な思いを感じたことはありません。ニューヨークで亡くなった長兄アルビンとノーヴーで亡くなった末弟ドン・カルロス・スミスのことが思い出されてなりません。私たちが頼り、慰めを受けてきたこれらの人々が、若さのただ中に天に取り上げられるのを見つつ、この地上で生き長らえるのは、私にとって実につらいことです。」(「ジョセフ・スミスの生涯」 p. 333)

「一層の愛」

ジョセフはもうひとりの弟の問題によって、愛するふたりの兄弟の死に際して感じた悲しみをしのぐほどの辛酸をなめることとなります。ささいなことで意見の相違があった後、ジョセフの弟ウイリヤムは彼に反発して、教会から去って行きました。背教したほかの教会員と共にジョセフを「墮落した予言者」と公然と宣言したのです。しかし、最悪の被害は家庭にもたらされました。ジョセフは、ウイリヤムが怒りのうちに教会を去った時のことを次のように書いています。

「彼は家に帰ると、兄弟の間で悪意に満ちた言葉を広めた。その言葉は特に若いサミュエルの心を毒したのだった。それから間もなく、ウイリヤムが町で私を非難する言葉を叫んでいることを知った。私たちに敵対する人々は大いに喜んだことだろう。」(「教会歴史」 2：297)

ジョセフは反抗的な弟に傷つけられながらも、なお彼を愛し、恨むことも憎むことも苦々しく思うこともありませんでした。あったのは忍耐と赦しの心だけだったの

です。ウイリヤムに対する彼の態度は、主の賢明な勧告に従ったすばらしい模範でした。主は言われました。「然る後、また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。かくて、彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。」(教義と聖約121：43-44)

ダニエル・タイラーは、ウイリヤムが背教して兄である予言者を排斥した直後に、ジョセフ・スミスと共に集会に出席しました。彼は迷える弟について苦悩するジョセフの姿を、感動的に記録しています。「私は彼の顔が悲しみに満ち、涙がほほを伝って流れ落ちるのを見た。それから少しして賛美歌と祈りで会が始まった。しかし、彼は出席者と対面する形ではなく、背を向けて、壁の方を向いてひざまずき、頭を垂れたのである。おそらく悲しみと涙を人に見せまいとしてのことだったのだろう。……

道を踏み外し罪を犯したと自分を非難する人々のために、主が彼らを赦したまい、彼らの目を開いて正しく物事を見つめることができるようにと祈る予言者の祈りは、……天からの知識と言葉によるものであったとすることができる。」(「ジュビニール・インストラクター」 1892年2月15日付, p. 127)

家族の霊的な結びつきをこのように重要視したことは、予言者としてのジョセフの偉大さを示しています。結局、寛容と愛により、この問題は克服されました。ウイリヤムによってジョセフと教会は多くの損害を被ったにもかかわらず、ジョセフは忍耐と愛をもってウイリヤムを再び家族と教会の輪の中に導いたのです。

「死にも勝る」愛

兄弟、友人、教会の指導者を含めたすべての交わりの



エマが病に倒れた時、ジョセフは幾晩も寝ないで付き添った。その手厚い看護ぶりと快復を願う祈りに、ジョセフのエマへの思いやりがよく表われている。

中で、ジョセフと兄ハイラムの結び付きほど強いものはありませんでした。ジョセフはこう書いています。「私はひそかに、すべての兄弟たちがわが愛する兄ハイラムのようであってほしいと願っている。彼は小羊の穏やかさとヨブの誠実さを兼ね備え、いわばキリストの柔和さと謙遜さを身につけているからである。私は死にも勝る愛をもってハイラムを愛している。私は彼を一度も非難したことがないし、彼も私を決して非難しなかった。」(「教会歴史」2:338)

もし私たちが、予言者ジョセフに倣って自分の兄弟姉妹を「死にも勝る愛」をもって愛するならば、私たちの心は永遠に固く結ばれ、家庭はまさしく天国のようになることでしょう。

「わが愛するエマ」

ジョセフ・スミスの日の光栄の家族関係にあって、愛するエマや子供たちとの深い愛による結びつきは、最も大切なものでした。彼と同時代を生きた人は、ジョセフの人生最大のモットーは、第一に「神と神の王国」であ

り、次に「家族と友人」であったと証言しています。(「ベンジャミン・ジョンソンからジョージ・S・ギブズへの書簡」p. 4 参照)このふたつのモットーはジョセフの生活の中で一体となっていました。なぜなら、後者なしに前者を手に入れることはできないことを、経験と啓示によって知っていたからです。

結婚して間もなくジョセフは、家庭の調和が保たれているときは主のみ業を果たすにも成功を見ることができると、という両者の直接的な因果関係に気がつきました。モルモン経の翻訳に従事していた時のことです。ある日ジョセフとエマは、新婚の夫婦にありがちな「口争い」をしたことがありました。ジョセフはホイットマー家の2階へ行ってモルモン経の翻訳を続けようとしたのですが、「すべては暗やみに閉ざされて」ひと言も翻訳を進めることはできませんでした。ジョセフは森に入って主の前に悔い改め、エマの赦しを得て初めて翻訳を続けることができたのです。(B・H・ロバーツ「教会概史」1:130-131参照)

予言者は示現の中で、結婚が永遠に続くものであることを知りました。それを考えると、^{はんりよ}伴侶を心から愛し、やさしく忠実であるように、とジョセフが聖徒たちに熱心に教えたのも当然と言えるでしょう。エマと子供たちへのジョセフの愛は、家族が永遠に結ばれ得るという確固とした彼の信念をよく表わしています。ジョセフを知る人々は、彼が末日聖徒の夫たちに妻を大事にするように繰り返し説き勧め、そうしなければ次の世で妻を失うことになるであろうと警告していたと言います。ルーシー・ウォーカー・キンボールはこう記しています。

「予言者ジョセフ・スミスは、夫婦の間にあるべき感情についてたびたび語っていた。それは……本当の意味で伴侶となるべきこと、すなわち、あらゆる面においてこの世で最も親密で大切な存在となるように、というこ

とだった。そして兄弟たちに、妻に心して接するように語った……。そして多くの人々は復活の朝に目覚めて、自分の罪ゆえに妻や子を取り上げられたことを知り、悲しみに沈むことになるであろうと警告した。「(「予言者を知っていた人々」ハイラム・L・アンドラス、ヘレン・メイ・アンドラス編, p. 139)

若いベンジャミン・ジョンソンは、予言者とその家族との素朴ながら意義深いある経験を、心に深く刻み込みました。ある日曜日の朝のことです。彼がジョセフと話しているところに、ジョセフの娘がふたり入って来ました。「ジョセフは、利発そうでかわいいふたりを指さしながらこう言った。『ベンジャミン、見てごらん。私がこの子たちの母親を愛するのも無理はないだろう。』

ジョセフがエマのことを女王のように考え、家庭の中でもそのように扱っているのがうかがえた。「(「ベンジャミン・ジョンソンからジョージ・S・ギブズへの書簡」p. 4)

ジョセフは、自分が教えたことを確実に実行していました。永遠に続く愛に満ちた結婚生活がいかに大切か熟知していたからです。エマが病に倒れた時、ジョセフは幾晩も寝ないで付き添いました。その手厚い看護ぶりと快復を願う祈りに、ジョセフのエマへの思いやりがよく表われています。1842年10月2日、日曜日の日記にはこう記されています。「エマの病状はまだ重い。終日彼女のそばにいた。」10月6日木曜日にはエマへの愛と思いやり、そして快復を願う気持ちをさらにこう書いています。「主が速やかに彼女を家族のもとに戻したまい、私の心が慰められんことを。」(「教会歴史」5:167-168)

おそらく、エマや子供たちへの愛が最もこまやかに表現されたのは、教会の仕事や迫害、違法な投獄のために家族から離れていた時でしょう。ジョセフの思いはいつも家族に向けられ、彼らと共にいたいと願っていました。

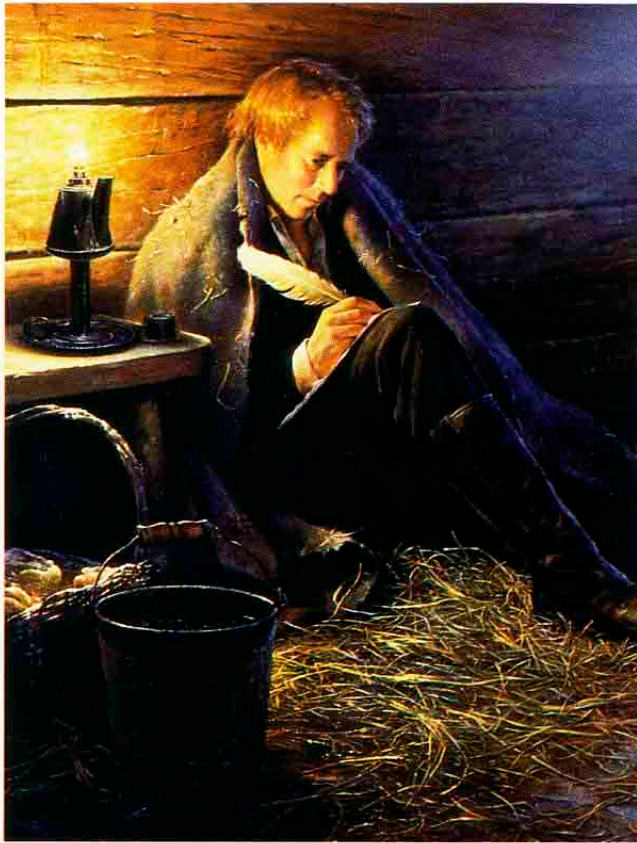
あれほど愛していた主のみ業に励んでいるときでも、家族への思いと気遣いを忘れることはなかったのです。伝道のためニューヨークとカナダに滞在中の1833年10月にはこう記しています。「気持ちは非常に充実している。主はわれらと共におられる。家族のことだけが案じられてならない。」(「教会歴史」1:419)ジョセフとシドニー・リグドンは家族への募る心配を主に表明して熱心に祈った時、教義と聖約第100章の啓示を受けました。主はその啓示で次のように約束なさいました。「汝らの家族は健在なり。彼らはわが手の^{うち}中に在り……

故に汝らわれに従いて……

汝ら心安かれ。」(教義と聖約100:1-2, 15)

ジョセフはまた、ニューヨークでの伝道を開始したころ、エマに手紙を送り大都會でのすばらしい経験を分かち合いました。目をみはる建物や見事な発明品の数々について丁寧に書き送っています。しかし、彼の本当の望みは世の珍しい物を見ることではなく、家族と家にいることでした。「目にしたいと思うものすべてを見て部屋に戻り、黙想して心を静めたとき、家とエマとジュリアへの思いが洪水のようにあふれ、私はたとえ一瞬でも彼女らと共にいたいと切に願った。私の胸は父として、夫としての愛情でいっぱいになった。」(「ジョセフ・スミスの書簡」デーン・C・ジェシー編, p. 253)

ジョセフにとって、家族と離れ離れになっていることほど寂しく悲しいことはありませんでした。命をねらう暴徒たちから身を隠して孤独に過ごさざるを得なかった日々は、どれほどつらかったことでしょうか。友人がジョセフを別の隠れ家に移そうとしていた時のことです。ジョセフは、なんとか馬車で自宅の前を通ってほしいと頼みました。ジョセフは敵が近くにいらないのを見定め、家に駆け込んで子供たちのベッドのわきにひざまずくと、短く祈りを捧げました。それから、子供たちと愛するエ



暴徒たちから身を隠していても、不潔な牢に投獄されていても、エマと子供たちへの愛は、慰めとなり、力の源となった。

マにキスをして、すばやく次の隠れ家に急いだのでした。(E・セシル・マクガビン「ジョセフ・スミスの家族」p. 138)

やはり暴徒から隠れていた時、ジョセフはだれにもまねのできない感動的で愛のこもった言葉を書き残しています。妻や子供と心おきなく会える日を何よりも願っているながらも、迫害が続く間、会えるのは、ひそかに、それも短い時間に限られていました。そんなふうにエマとのつかのまの再会を果たした後、彼はこう記しました。

「愛するエマ……わが青春の妻、愛により選んだ人。しばし目を閉じてふたりで経験してきた過去を思えば、折にふれてその道々にちりばめられ、ふたりのテーブルを彩った数々の出来事、疲労と困苦、悲しみと苦しみ、そして喜びと慰めが、私の心にこだまする。ああ、私の心にしばし様々な思いが交錯した。しかし7度の苦難にあらうとも再び私の思いは彼女に帰る。——確固として揺るぎなく疑いの余地のない——永遠に変わらぬやさしいエマへ。」(「教会歴史」5：107)

暴徒たちから身を隠していても、不潔な牢^{ろう}に投獄されていても、エマと子供たちへの愛は、慰めとなり、困難

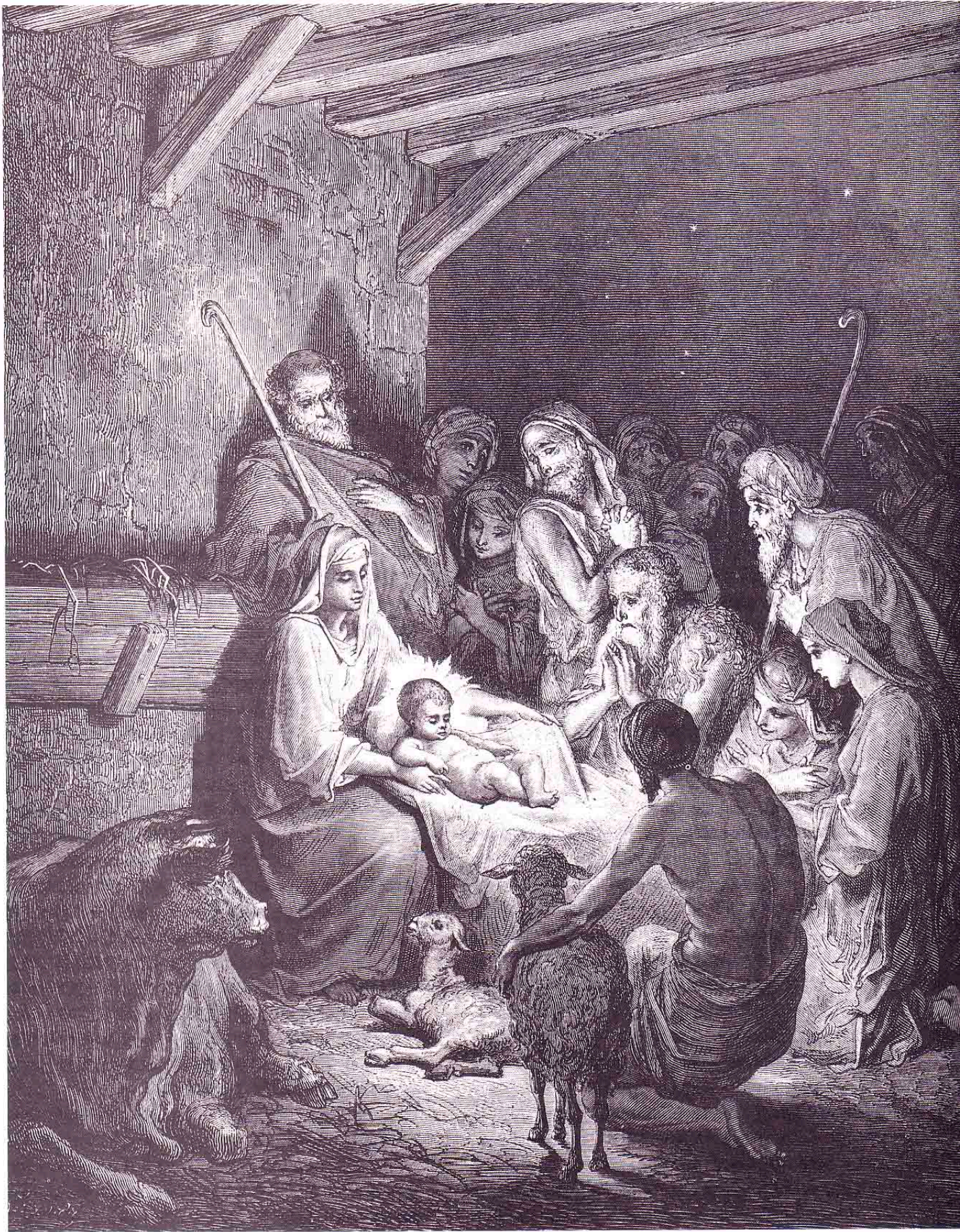
に耐えて家族の元に戻ろうとする力の源となりました。この度重なる別居の試練を経て、彼の愛がより一層深まったのは疑う余地のないことです。しかし、心おきなく自由に家族と会えるときこそ、ジョセフは幸福そのものでした。日記にはこのような記載が随所に見られます。「1834年3月27日一家にいて家族と共にとても楽しく過ごした。」(「教会歴史」2：44)

今日、くつろいだり、疲れを癒^いすには、家庭の外で家族と離れなければならないと思っている人が大勢います。しかし、ここでも私たちは予言者の家族愛に学ばなければならないのです。1838年8月には「激務と疲労」のため、3日の間家族と家にとどまって「疲れを癒した」と書いています。(「教会歴史」3：55) 良い夫、父、息子、兄弟であることは、予言者としての務めを十分に果たすには必要不可欠なことでした。

この物質的な世の中で、慌ただしさとストレスに囲まれた私たちは、一番大切なものは何か忘れてしまいがちです。しかし、予言者ジョセフ・スミスの模範は、人生で本当に価値あるものは家族であることを絶えず思い起こさせてくれます。家族こそまことの喜びが得られ、最も価値ある奉仕がなされるべき場所なのです。

ジョセフ・スミスの数々の功績と偉大な人格は、私たちすべてにとってすばらしい模範です。彼の偉大さの中でも注目すべき特質は、その模範を熱心に見習えば私たちも身につけられるものであり、予言者の日記に簡潔に、そして繰り返しこう記されています。「私は家族と共に過ごした。」(「教会歴史」4：550)□

*ブレント・L・トップ——ユタ州、ブリガム・ヤング大学で教会歴史と教義の助教授を務めている。





キリスト

その降誕とみ業

ギュスターブ・ドレの木版画

見よ、〔博士たち〕が
東方で見た星が、彼
らより先に進んで、
幼な子のいる所まで
行き、その上にとど
まった。(マタイ 2 :
9)

そして〔羊飼たちは〕
急いで行って、マリ
ヤとヨセフ、また飼
葉おけに寝かしてあ
る幼な子を探しあて
た。(ルカ 2 : 16)

フランスのギュスターブ・ドレ
(1832-1883)の挿絵には、キリ
ストの生涯における出来事が、いきい
きと表現されています。救い主の生涯
から取ったこれらの情景は、ドレが旧
約聖書、新約聖書のために創作した
241点の挿絵の一部です。

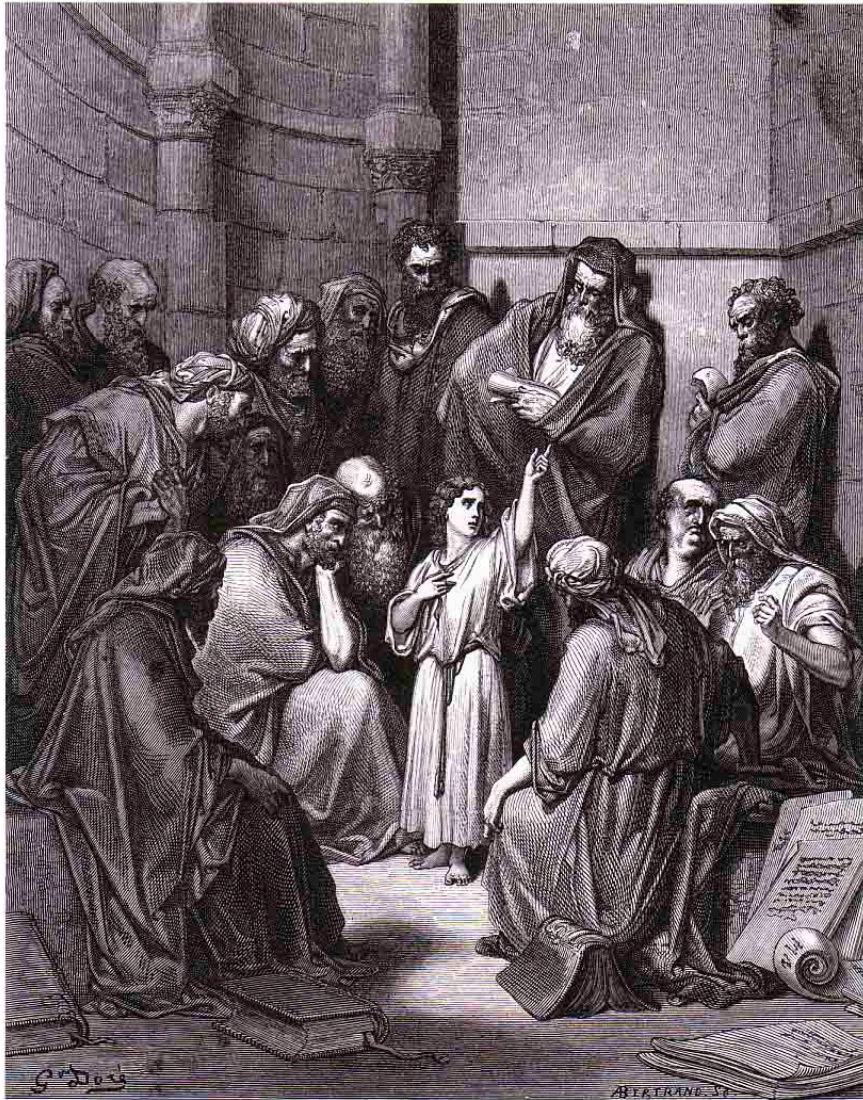
ドレの「聖書」は、宗教的な挿絵の
歴史上、重要な位置を占めています。
15世紀から18世紀にかけての傑出した
画家のほとんどは、自分たちの文化的
背景を基に聖書の情景を描きました。
あたかもその出来事がその作者の国で、
しかもその時代に起きたかのように描
いたのです。しかし、ドレはそのよう
な慣習に従いませんでした。代わりに
彼は、入手できる資料を基に、聖書に
出てくる文化、衣服、植物、動物、建
築、風景を調べ、ありのままを表現し
ようとしたのです。

ドレは劇的で雄大な場面ばかりでな
く、静かで、落ち着いた場面も選びま
した。そしてそれを写実的かつ情熱的
に表現し、物語に生命を吹き込んだの

です。

ドレの用いた芸術形式は木版画で、
それは19世紀において、本の挿絵を複
製する一般的な方法でした。まず画家
が木の板に、ある場面を描きます。次
に、画家のデザインを基にして彫刻師
がこの木版に様々な深さや広さにわた
って彫刻します。(ドレの挿絵の下に
はふたつの名前が見えます。ひとつは
ドレのもので、もうひとつは彫刻師の
ものです)それから電気製版と呼ばれ
る工程を経て、元の木版から金属版が
作られます。そうすることによって原
版をすり減らすことなく挿絵が何枚も
取れるのです。最後にインクを金属版
に付け、絵を紙に印刷するのです。

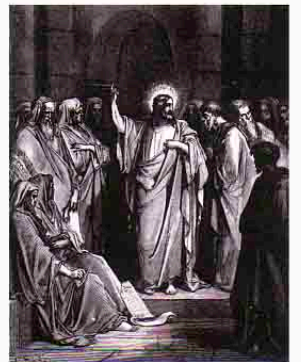
ドレの「聖書」は1865年に初版が発
行されました。今月号の「聖徒の道」
に掲載されたいくつかの場面は、1866
年の版からのものです。さらに後の号
で、キリストの生涯の最後の1週間に
焦点を当てたドレの挿絵を掲載する予
定です。□

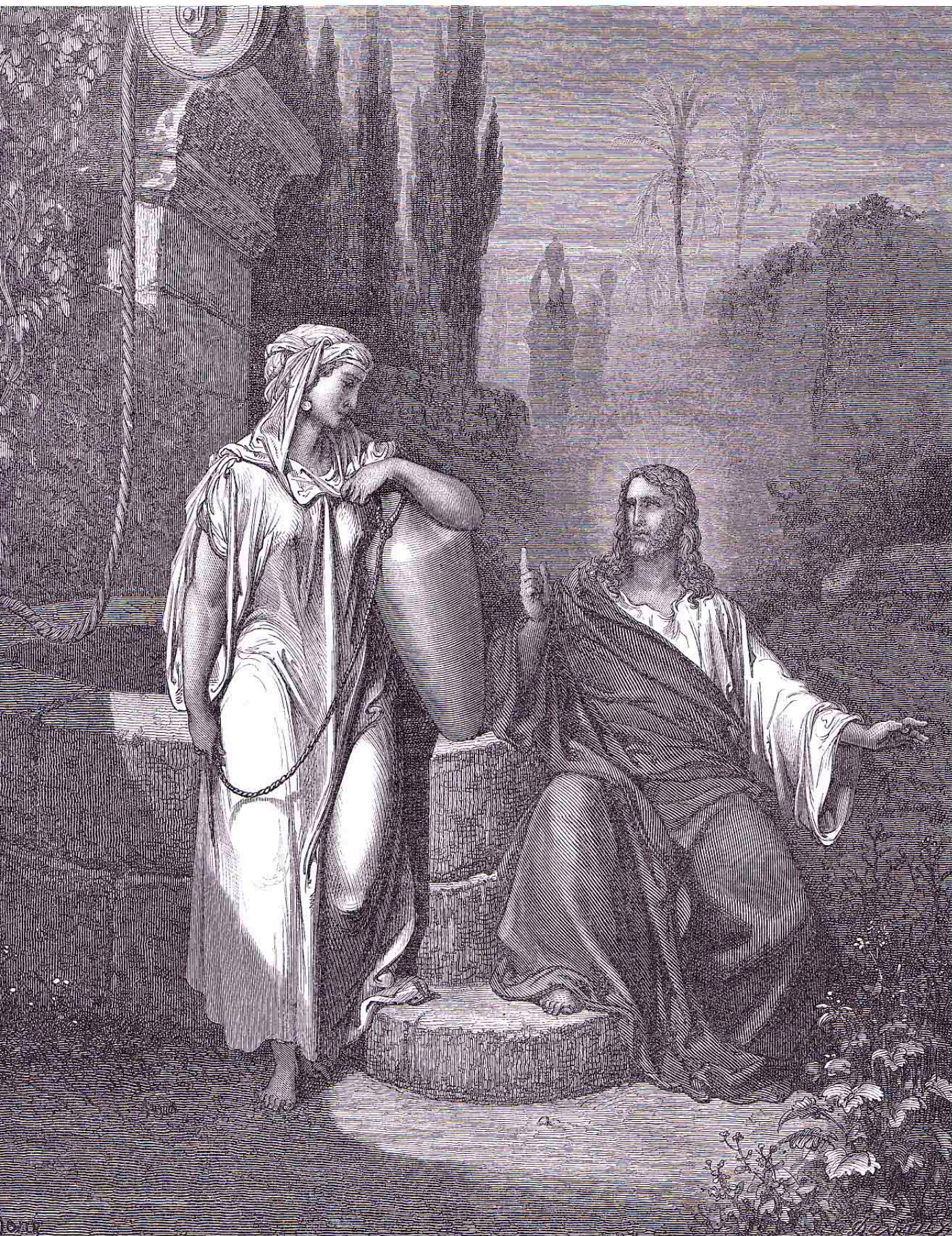


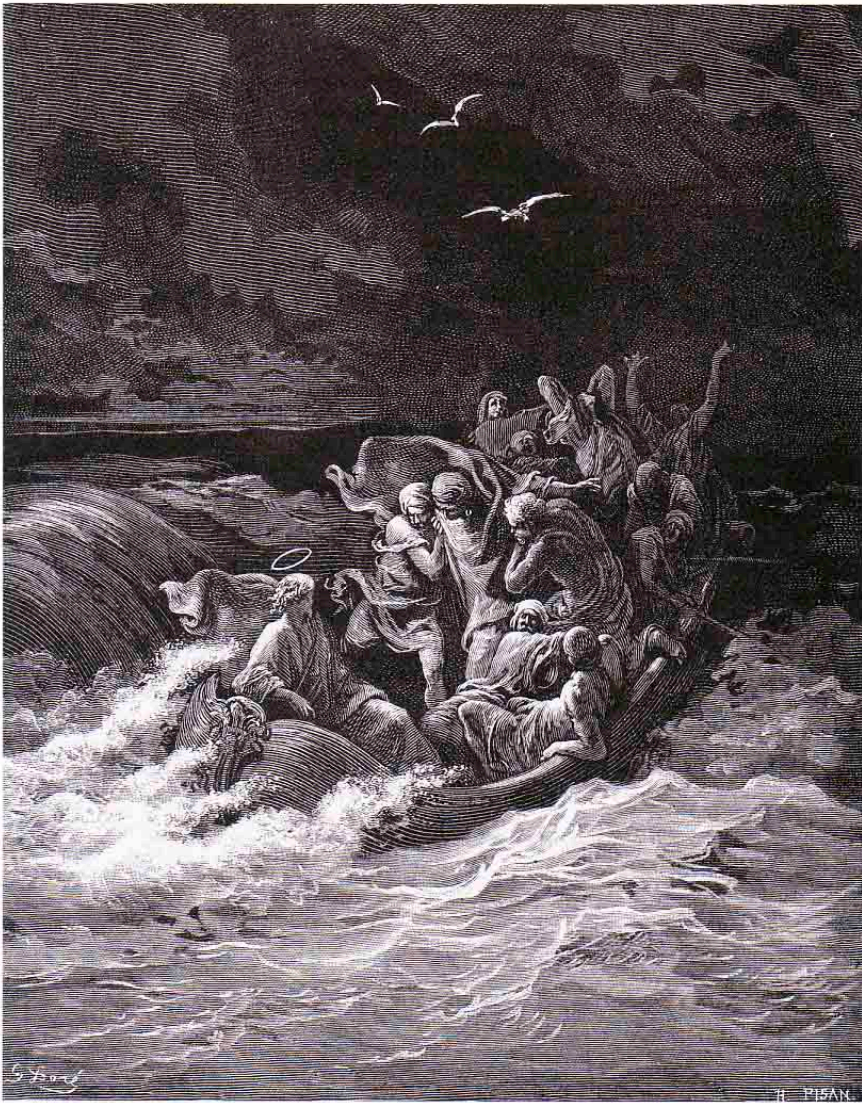
ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に……言われた。……「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない……。」
 (ヨハネ4：7、13—14)

そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、彼らは驚いて言った、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。この人は大工の子ではないか。」
 (マタイ13：54—55)

そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。
 (ルカ2：46—47)







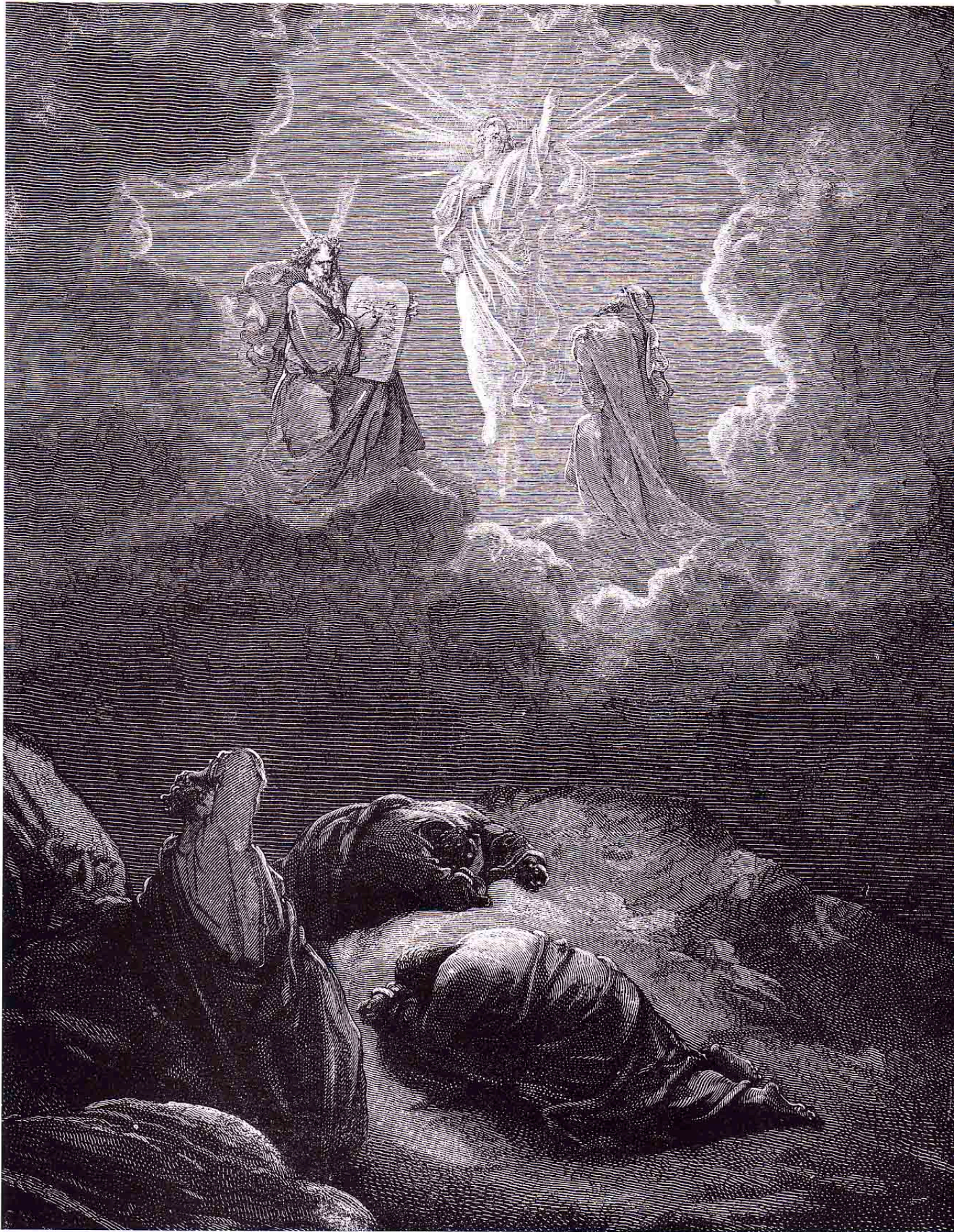
すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。ところがイエス自身は、^{とも}船の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。(マルコ4：37—39)

すると大ぜいの群衆が、足なえ、不具者、盲人、おし、そのほか多くの人々を連れてきて、イエスの足もとに置いたので、彼らをおいやしになった。(マタイ15：30)

イエスは〔ヤイロの〕娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい。」するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。(ルカ8：54—55)

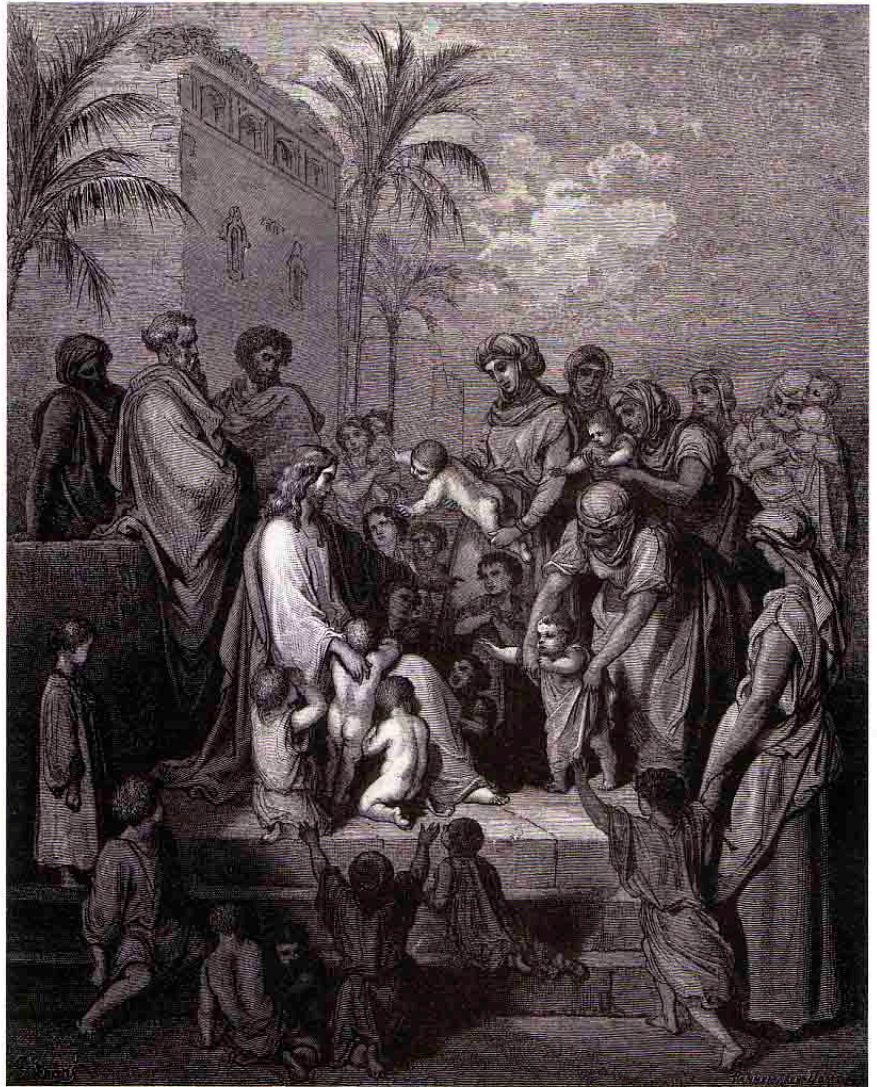






イエスはペテロ、ヤコブ、……ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、……すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。(マタイ17:1-3)

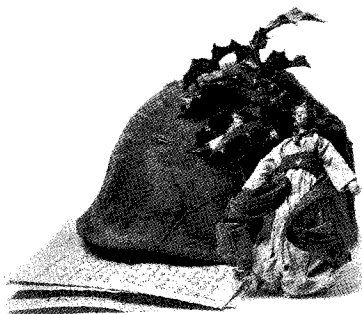
イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言みことばに聞き入っていた。(ルカ10:38-39)



イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に來るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」(マルコ10:13-14)

ベトナムでの クリスマス

ジョン・L・マイセンバック



毎年、キリスト降誕の場面を表わす置き物や、伝統的な飾りを出してくると、クリスマスの精神が我が家に宿るのを感じます。そして、あの天使をいつもの場所に置く時に、地球の裏側での出来事を思い出します。

1970年12月22日のことです。私は南ベトナムのソンビーという村に近い密林にいました。物資補給用のヘリコプターが近づいて来る音が聞こえてくると、私たちは着陸地点を整え、補給物資を待ちます。水や食糧、武器のほかに、私たちにとっては最も大切な、家族からの手紙や小包が届くのです。

私は、指揮下の兵士たちがそれぞれの食糧、手紙や小包などを受け取るのを見届けてから自分あての手紙を読みました。中には4週間も前に出された手紙もあります。手紙に目を通しながらも、私の心はさまよい、たくさんの事柄が私を悩ませます。ベトナムに来て335日になりますが、そのほとんどを戦場で過ごしてきました。私の心は殺伐とし、人生に失望していました。

そして、クリスマスの3日前だというのに、私の心にあったのはあと29日で任務も終わり、家に帰れるということでした。戦場での最後の任務を無事に果たし、この責任から解かれること、さらに指揮下の兵士たちの無事を願っていたのです。また、私の後任者がいい上官で、後に残る兵士たちとうまくやっていけるようにと考えていました。

小包を開くまで、クリスマスやキリストの誕生のことなどまったく頭にありませんでした。中には金髪で白い服を着た30センチほどの天使のオルゴールが入っていました。私はそれを逆さにした武器容器の上に乗せて、愛する母からの手紙を読み始めました。

彼女自身の言葉で、救い主の誕生を

物語り、穏やかで崇高な証が述べられています。私の心は高揚しました。子供のころ、母から何度もクリスマスの話を聞いていましたが、その時ほど、キリストのみたまを近くに感じたことはありませんでした。

手紙から目を上げると、ほかの兵士たちが白い天使を見つめています。私はオルゴールのねじを巻きました。話をする者はだれひとりなく、『聖し、この夜』が辺りに響きわたります。クリスマスの天使が、私たち一人一人の心を打ち、キリストのみたまが、私たちの心を震わせました。涙を流している者、互いの思いを伝え合っている者もいました。

やがて、荷物をまとめ、故国に帰る仕度をする日が来ました。私はあの天使を丁寧に包み、リュックに入れながら、家や家族、友人のことを思いました。そして何にもまして、イエス・キリストのことと、イエスが私のためにしてくださったすべてのことに思いをはせたのでした。□

喜びに満ちた奉仕

今年扶助協会の姉妹たちは、人々に奉仕することによって150年祭を祝ってきました。世界の至る所で、無私の奉仕と温かい愛情にあふれた行ないが見受けられました。この慈善奉仕は、扶助協会が創立以来歩んできた150年の歴史にふさわしい業と言えます。

慈善奉仕の態度を身につける

イレイン・L・ジャック会長は、慈善奉仕とは個人が身につける態度であると定義づけています。「慈善奉仕とは、しなくては気がとがめるので行なうというものであってはなりません。聖典の中でキリストの純粋な愛としてはっきりと定義された特質、つまり、すばらしくやがいのあるもの、平安と喜びに満ちたものと考えてください。」

スペイン北部のある町を、ふたりの姉妹宣教師がとぼとぼと歩いていました。雨の降るどんよりとした日で、彼女たちのメッセージに関心を示す人はだれもいませんでした。ふたりが町の公園に近づくと、シルビア・ゴリソン姉妹は自分たちの前にいる人々がほとんど女性であるのに気づきました。その時みたまが彼女にこうささやくのを感じました。「この人たちは皆、あなたの姉妹です。」彼女は後にこの出来事についてこう語りました。「私の心に光がさし込んだように感じました。」イエス・キリストの福音によって結ばれた、世界中の姉妹たちのきずなを一層はっきりと理解できるようにみたまが助けてくれたと、ゴリソン姉妹は記



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON WING

しています。

エズラ・タフト・ベンソン大管長が述べているように、「キリストの純粋な愛は、永遠の進歩とほかの人の幸福のみを求めます。」(『神の性質』「聖徒の道」1987年1月号, p.54参照)キリストの愛を様々な方法で人に示すことは、私たちすべての大いなる使命です。

奉仕することによって、私たちは人を尊敬し愛するようになります。そして、人を愛するようになれば、さらに主に近づくことができます。

ほかの人に対する態度は、私たちが奉仕していくうえでどのような影響を及ぼすでしょうか。

慈愛の心は行動を伴う

南アフリカのある若い母親が最近癌で倒れた時、ワード部の姉妹たちは、皆でその姉妹の家族を助けました。ほとんど毎日食事を運び、子供たちの世話をしました。病状が進み、若い母親が暗い気持ちになると、夫が仕事から帰るまで扶助協会の姉妹たちが交替で付き添いました。入院しなければなら

なくなっても、姉妹たちは付き添いを続け、彼女が亡くなる時も彼女と家族のそばにいました。

この慈愛の心に満ちた行ないに加わったある姉妹はこのように述べています。「彼女が亡くなって、姉妹たちは深く悲しみました。彼女への奉仕と愛を示す機会を通して私たちは一致し、強められました。」

ワード部や支部でどのような愛のこもった行ないを目にしましたか。

良き日の始まり

1842年、姉妹たちは困っている人々を探し、自分たちが持っているものを分かち合うための組織を作りました。それがノーヴー女性扶助協会の始まりです。ジョセフ・スミス大管長はこのように予言しました。「これは貧しき者、困っている者にとって良き日の始まりである。彼らは喜びに満ちたされ、あなた方の頭には祝福が注がれるであろう。」(『教会歴史』4:607)それは確かに彼らにとっても私たちにとってもより良き日の始まりでした。創立以来、扶助協会の姉妹たちは貯蔵した小麦粉を空腹な人に与え、病気の人を看護して多くの人命を救い、被災地に緊急物資を送りました。現在も、世界中で扶助協会の姉妹たちは大小様々な方法で隣人に愛の手を差し伸べています。私たちはすべての姉妹が慈愛に満ちた態度を生涯身につけ、続けて奉仕を行なってくださるよう願っています。

慈愛の気持ちを常に持ち続け、慈善奉仕を常日ごろから行なうにはどうしたらよいでしょうか。□



監督として迎えた 最初のクリスマス

マービン・K・ガードナー

PHOTOGRAPHY BY STEVE BUNDERSON; POSED BY MODELS

私たちは居間でそれぞれ腰掛けました。彼女は90歳を超え、私はまだ30代です。彼女の健康状態を考えれば、什分の一の面接のためにこの雪の中を監督室まで来るのは無理でした。ですから、代わりに私が彼女の家に寄ったのです。

彼女から2枚の用紙を受け取りました。ひとつは、その年彼女が教会に支払った什分の一についての手書きの記録です。もうひとつは、同様の内容で打ち出されたコンピュータの出力リストです。

「ごらんのとおり、私の記録は書記の記録と完全に一致していますよ」と彼女は言いました。私は、仮に食い違いがあったとしても、

それは彼女の間違いだとは思えなかったことでしょう。

それから、監督として什分の一の面接で尋ねることになっている質問をしました。

「姉妹、これで今年の什分の一は完全ですか。」

彼女は、信じられないというような目をしました。そして少し怒ったふりをして「監督、そんなこと聞くんてばかげてますわ」と言いました。

彼女の場合、確かにそのとおりでした。共に笑った後、私は彼女を抱き締めました。私

は質問する前から、彼女の答えを知っていました。しかし、自らの信仰を声に出して報告する機会を、彼女が喜んでいることも知っていたのです。

去年の12月は、監督に召されて最初のクリスマスでした。什分の一の面接を行なうのももちろん初めてです。什分の一の面接とクリスマス、このふたつのイベントの美しい共通点をこれほどはっきりと感じたことはありませんでした。クリスマスの時期に、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員たちは、監督と会って、年間を通して主に納めた献金について話します。実に時宜にかなったことであると、改めて感じました。

私は、個人として、夫婦として、または家族として監督室に来て、年収の10分の1を完全に主に納めていることを、ひそやかに、しかし確信をもって言える信仰深いワード部の会員たちに心打たれました。彼らのほとんどが、宣教師基金や困っている人を助けるための断食献金にも協力していることを思うとき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

献金の額の大小はありますが、すべての人が惜しみなく喜んで納めています。

私は、会員たちの惜しみない態度に感謝しました。「レプタふたつ」(マルコ12:41-44参照)に当たる献金を納めた未亡人の姉妹、わずかなお小遣いから小銭を献金する子供たちに感謝しました。十代の若者たちが店で働き、芝を刈り、カボチャを取り入れて得た収入の完全な什分の一を支払っていることに感謝しました。大学生、独身成人、限られた収入で幼い子供を育てている若い両

親、そして子供から手が離れ、収入にゆとりのある中年の夫婦の方々にも感謝しました。そして、定年退職した会員、あるいは失業中の会員たちに感謝しました。彼らは、以前よりは額が減ったものの、完全な什分の一を納めているのです。

与えるというクリスマスの精神を、これほど強く感じたことはありませんでした。

ある日、年配の夫婦が監督室に入って来ました。彼らは、完全に什分の一を納め、さらに宣教師基金、断食献金も惜しみなく納めています。話をしていると、ご主人が言いました。「ワード部宣教師基金にも献金したいのです。どの宣教師の資金を援助するかは、お任せします。最も必要としている宣教師に、この小切手を使ってください。」(その時、私たちのワード部から15人の宣教師が召されていました)

差し出された小切手を見て、なんと多額な献金をするのかと私は驚きました。「しかしあなたがたは、同じように言って、これと同額の献金を数週間前にしたばかりじゃありませんか。こんなにも多額のお金を短い間に2度も献金して、本当にいいのですか。」

彼と奥さんは、心配ないと言いました。そしてこの献金を匿名にするよう希望したのです。

自分の娘や息子が宣教師でない人々も、ワード部宣教師基金に惜しみなく献金しました。中央モルモン経基金や中央宣教師基金に献金する人々もいました。現在教会では建築のための資金を、建築基金という特定の基金を設けずに、すべて什分の一から賄っていますが、それを知っていながら、ユタ州パウンテフル神殿の建築に用いてほしいと言って、献金する人もいました。

別の夫婦が入って来ました。彼らもまた年間を通じて、惜しみなく献金してきました。いよいよ面接を終えようとした時、夫が言いました。「監督、クリスマスを迎え

るに当たって、経済的に困っている人はワード部にいませんか。余るほどお金がたくさんあるわけではありませんが、必要な人がいたら、私たちの持っているものを差しあげたいのです。」

すぐに、ひとりで子供を育てているある姉妹が心に浮かびました。彼女は援助に頼らず自立しようと懸命でした。しかし、彼女はお金に不自由しているはずです。近く復学することになっていましたし、支払わなければならない医療費もありました。彼女こそ、この夫婦の寛大な申し出を受けるにふさわしいと思いました。

私は、彼女に代わってこの夫婦の善意を受け取りました。彼らは、受け取る人の名前は知りたくないし、自分たちの名前も明かさないうでほしいと言いました。

ご主人は、ズボンのポケットから財布を出し、何枚かの20ドル紙幣を机の上に置きました。その間、奥さんは申し訳なさそうに言いました。「あまり多くないですよ。子供たちもそれぞれ独立して、以前ほどワード部に貢献できなくなりました。本当にわずかなのですが。」

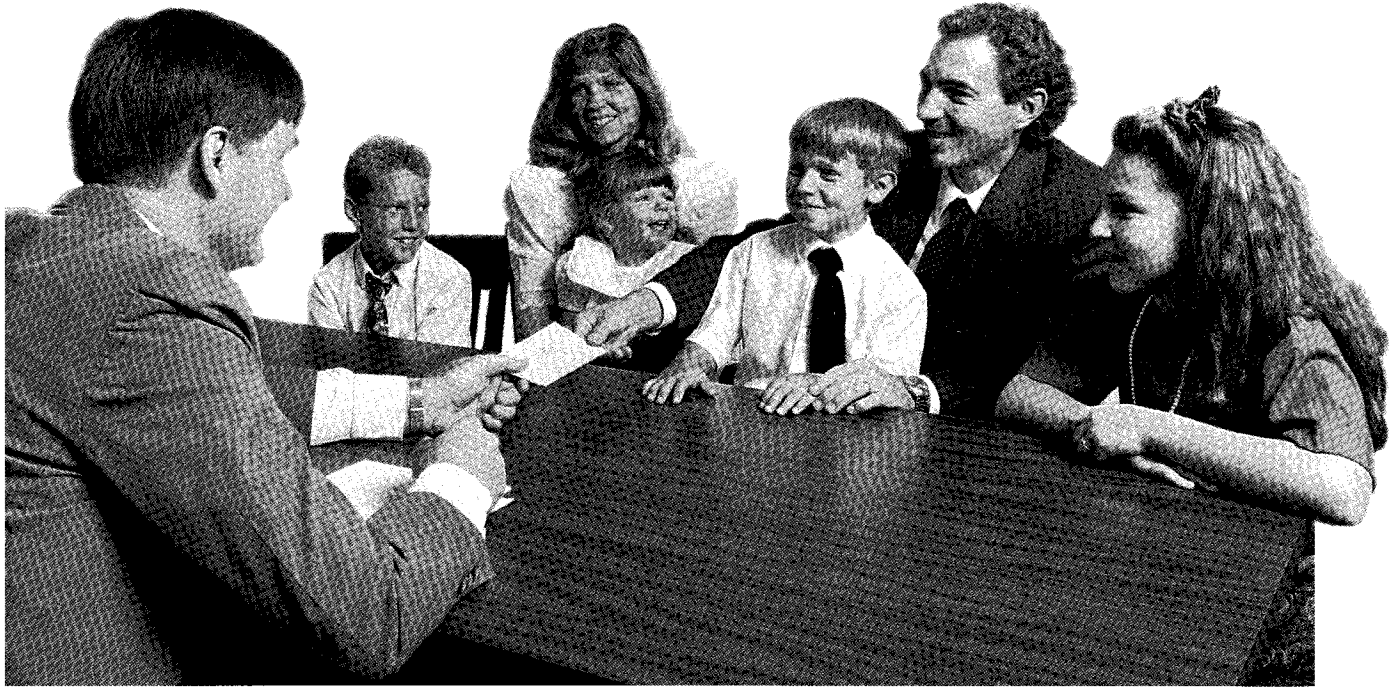
私は姉妹に、「そんなふうには思わないでください」と話しました。彼らが果たしている教会の召しや、隣人や年配の夫婦に対する無私の奉仕は、立派なものであることを知っていたからです。そして、彼らの惜しみない心に感謝しました。

翌日、相手先の姉妹のもとへお金を持って行く途中、私は少し不安になりました。「彼女は、このお金をどう思うだろうか。気分を害したりしないだろうか。はたして受け取ってくれるだろうか」と思ったのです。

私はお金を彼女に手渡すとき、このお金に込められた愛の精神を伝え、同じ気持ちで受け取ってくれるようにと話しました。

すると彼女は、喜んで受け取りました。

「それなら、遠慮なくいただきます。暮らし向きが良



かったところは、私もよく匿名で、ちょうどそれと同じようなことをしてたんですよ。」そして、彼女は家族で何年も続けていたひそかな贈り物について話してくれました。冷凍の七面鳥を買ってきては、付け合わせの野菜と一緒にだれかの戸口に置いてきたのだそうです。経済的に困っている人に現金書留を匿名で送ったり、助けを必要としている友人の子供にコートや長靴を買ってあげたりもしたと言います。しかし、今は彼女こそ助けを必要としていたのです。こうして彼女は、この贈り物を感謝して受け取ってくれました。

私は、多くのワード部の会員が1年を通して納めた献金について振り返りながら、彼らが1年を通して行なった奉仕の業についても思い起こしました。毎週毎週レッスンを準備し、人々を指導し、どんな召しであっても献身的に働く会員たち。春と秋に、若い男性と若い女性は、年配の会員たちの庭の清掃をしました。姉妹たちは壁紙の張り替えやペンキ塗りの奉仕をしました。長老定員会や大祭司グループの兄弟たちは、庭仕事や修理などで手助けの必要な人々の力になりました。若い女性と扶助協会の姉妹たちは、ホームレスの施設を何度も訪問し、温かい励ましの言葉と共に食糧や日用品を提供しました。

若い男性は、雪が降るたびに自発的に皆で協力して、年配の会員の家の前や道路の雪かきをしました。ボーイスカウトは、ソルトレークにある小児医療センターのためにおもちゃや本を集めました。姉妹たちは、病人や悲しむ人、様々な事情で家を出られない人々に食事を届け、励ましの言葉をかけました。神権者は病の癒しや慰めを与えるための祝福を数え切れないほど授けました。会員たちが教会の缶詰工場で奉仕することにより、監督の倉

庫の棚はいっぱいになりました。会員の多くが、隣人の悩みや相談に静かに耳を傾け、思いやりを示し、彼らを霊的に高めました。また、だれにも知られることなく奉仕してきた人々もいます。

助けを受ける側の人々から届いた、たくさんの感謝の手紙も思い出されます。

9歳の男の子の手紙を紹介しましょう。この手紙は、彼の家族が監督の倉庫から多くの食糧を受け取った後に、扶助協会会長と私あてに送られた手紙です。(匿名にするために彼の兄弟の名前は変えてあります)

「大好きなガードナーかんとくとトーマスしまいへ。

ぼくは、ちょうど学校から帰ったところでした。リッキーがさいしょに家に入って言いました。「何だろう、これ。」それから、ぼくもリッキーが見ていた物を見ました。それは食べ物の山でした。部屋中が、はこやふくろやかんづめ、それに牛乳や卵でいっぱいでした。リッキーが言いました。「見て、オレンジが山のようにあるよ。」

ぼくたちは、トーマスしまいや世界中の教会の人たち、とくにぼくたちのワード部のみなさんにお礼を言いたいです。皆さんが助けてくれたこと全部に感しゃします。中でもかんとくの倉庫から、こんなにすばらしい食べ物をくれて本当にありがとう。愛されている、大切にされていると感じることは、みんながぼくたちを思ってくれていると感じることは、本当にすばらしいことです。

感しゃを込めて。(署名)」

やがて、クリスマスイブを迎えました。わが家では、十代からまだ幼い子供たちまでが一緒になって、恒例のキリスト生誕劇をちょうど演じ終えたところでした。こ

の劇は、聖句とクリスマスキャロルを織り交ぜたもので、衣装もそろえてあります。生まれたばかりの赤ちゃんが幼な子キリストの役を務め、3歳のマリヤと6歳のヨセフ、天使と羊飼、それに博士も登場します。(私はいつものように、なんとかロバの役を果たしました)

だれかがドアをノックしました。真っ赤な衣装のサンタクロスでした。陽気に笑いながら居間に入ってくると、子供たち一人一人に大きな声でお祝いのあいさつをし、大きな袋からプレゼントを取り出して家族全員に配りました。そんなサンタを見ていて、このサンタがワード部のある会員とどことなく似ていることに気づきました。

やがてサンタは、「メリークリスマス」と言って帰って行きました。下のふたりの子供たちは、サンタクロスのそりを引っ張るトナカイを見ようとして、玄関口へ駆けて行きました。しかし、サンタはそりをどこかの通りに止めて来たようでした。リンリンという鈴の音を響かせながら、楽しそうに近くの家の前を歩いて雪夜に消えて行きました。

監督に召されて初めてのクリスマスは、私にとって本当に意義深いものでした。クリスマス、分かち合いという喜びに満ちた時期としてくれたワード部の会員たちに、そして1年を通じてそのような心を伝えてくれるすべての人々に心からの感謝を述べたいと思います。

そして、模範を示し、最もすばらしい贈り物をすべての人々に与えてくださった救い主、キリストに思いをはせるとき、言葉では言い尽くせないほどの感謝で私の心はいっぱいになります。

確かに、私の9歳の友人の言うとおりで。「愛されている、大切にされていると感じること、みんなが自分たちを思ってくれていると感じることは、本当にすばらしいことです。」□





本当の贈り物

リベカ・ラッセル

私たちのセミナーのクラスでは、毎年クリスマスにプレゼント交換をします。いつものように去年も、どんな方法で贈り物を交換するかについて集会を開きました。

「いつものようにプレゼントの相手をくじで決めて、いくらぐらいのものを買うか決めようよ」とだれかが言いました。

「プレゼントを買うのはやめて手紙を書いてはどうかしら」とエイミーが提案しました。「もらった名前の人をそっと観察して、その人の良い点を見つけて手紙に書くの。私たちがどんなことに気がついたか知らせるのよ。」

いろいろ話し合った末、全員一致でその案に決まりました。もっともほとんどの人はそれほど乗り気には見えませんでした。お金を使わなくて済むのを喜んだようでした。

私はミッシェルという女の子に当たりましたが、彼女についてあまりよく知りませんでした。いくつかのクラスで一緒でしたが、話をしたことはありません。私はセミナーと歴史のクラスでミッシェルを観察し始めました。

ミッシェルは恥ずかしがり屋でしたが、廊下で知らない人と擦れ違ふとき、いつも温かくほほえんでいました。とても知的であることもわかりました。歴史のクラスでとても良い発言をしていたのです。一番感動したのは彼女の人々に対する愛でした。セミナーの帰り道で、泣いている女の子の肩に腕を回してあげたり、体が不自由なひとりぼっちの生徒と友達になったりしていました。

こうしてミッシェルは、私の知らない人ではなく、尊敬する人となりました。そして、彼女に対して愛を感じました。

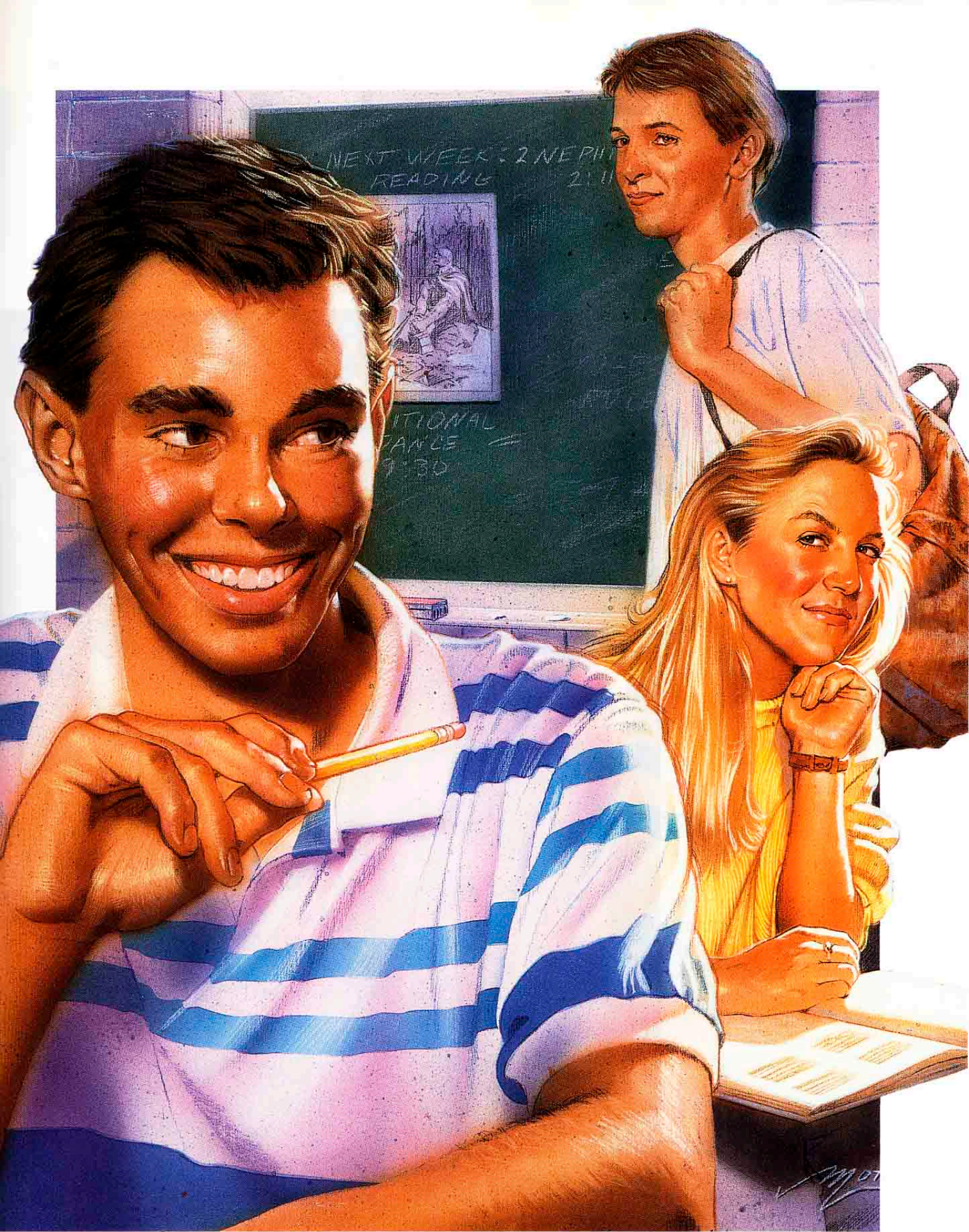
手紙を交換する日がついにやって来ました。私は立って手紙を読みあげました。ミッシェルに対して私の感じていることを、皆に伝えるのはたやすいことでした。ほかの生徒も同様な経験をしました。

ジョンは次のように言いました。「ぼくがグレンと仲良くなったのは、彼が所属している劇団の芝居を見てからです。グレンのお母さんに電話で彼のことを聞いていて、初めて彼が役者だと知ったのです。クラスの中に、演劇で主役を演じている人がいることに誇りを感じます。彼の役者としての才能にどんなに感心しているかを手紙に書くのが待ち遠しいほどでした。」

それからの1時間ではっきりわかったことは、私たちはもう自分が何をもらえるかではなく、だれかほかの人を喜ばせてあげることに関心を持つようになったということです。アンジーは今まで仲良くできなかったパトリックに愛を示してから、彼に対する悪感情がなくなり、好きになり始めました。

その日に交換したセミナークラスのクリスマスプレゼントは、お金では買えない大切なことを教えてくれました。多くの生徒たちの心は活気づき、その年度の残り、クラスの皆はひとつになれたのでした。

私たちはだれにでも良い点があることと、人々に愛を分かち合うとき、本当の贈り物をしているということを知りました。□



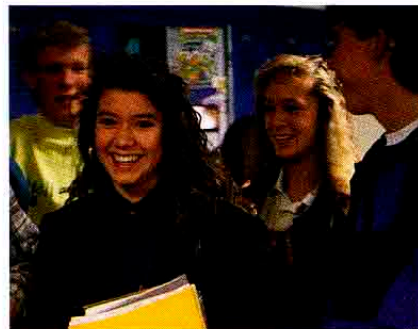


コーナー

モルモシ



PHOTOGRAPHY BY JED CLARK



ラリー・A・ヒラー

地図を見ていると、道路が交差する地点に1、2軒の小さな店があるだけ、という町があるものです。同様にアラスカのある高校には、ロッカーが置いてあるだけの「モルモンコーナー」と呼ばれる場所があります。

何が違うかと言えば、もっと大きな町が目当ての人には小さな店は当て外れでしょうが、「モルモンコーナー」に立ち寄ってがっかりする人はいないことです。

アラスカ州フェアバンクス、ラスロップ高校で末日聖徒の若人は、皆際立った存在です。その笑顔と親しみの持てる態度、そして指導力は、末日聖徒であることを雄弁に物語っています。彼らは1日の授業が始まる前や、昼休み、放課後と、折にふれて集まるこのロッカーのある場所を、「モルモンコーナー」と名づけました。

アラスカの荒野の中心部、この町の真ん中に、彼らは狭いながらも居心地のよい自分たちの場所、「モルモンコーナー」を作った。



アラスカ州、フェアバンクスの末日聖徒の若人。明るい日差しがほとんど1日中照り続ける夏を利用し、地域奉仕活動の一環として、町に建つ記念碑の手入れをし、きれいに磨いた。

校長のテッド・ポールセン先生も、学校の中で末日聖徒が果たす役割の大きさに一目置いています。「生徒会にも、バスケットボールチームにも末日聖徒の若者がいます。学校のリーダー的存在ですよ。彼らには大きな希望があります。人生に対する指針、はっきりとした目標、その目標を達成する方法をちゃんと知っているのです。」

ラスロップ高校に通う校長先生の子供も、末日聖徒の生徒たちについてこう話していたそうです。「服装や話し方、そして全体の雰囲気から、末日聖徒の生徒はすぐにわかるよ。彼らのこと、すごく尊敬してるんだ。」

さて、「モルモンコーナー」はどこにあるのでしょうか。末日聖徒の生徒の中で、だれかが便利な場所にロッカーを割り振られたら、そこが「モルモンコーナー」になります。ですから、場所は毎年変わります。「モルモンコーナー」が2カ所できることもあります。

そこで、どんなことが行なわれているのでしょうか。冗談を言い合ったり、放課後の計画を立てたりしています。また、友達同士の情報を交換したり、福音についてじっくり話し合ったり、励まし合ったりもします。スーザン・ベネフィールドがそれについて話してくれました。

スーザンは学校にいる末日聖徒のことを知って、好意を持っていました。「初めて会った時気がついたのは、みんなにここにこしているということだし







フェアバンクスのモルモン
の若人には、福音に対する
確かな情熱がある。自分た
ちの活動やライフスタイル
を楽しみながら、人々に手
を差し伸べ、福音を伝えて
いるのである。写真には、
教会員以外の顔も写ってい
る。フェアバンクス公園に
置かれているアメリカ先住
民のトーテムポールは、こ
の地方の豊かな歴史を物語
っている。木でできたトー
テムと若者たちの違いは歴
然としている。末日聖徒の
若人には、トーテムのよう
に生気のない者はひとりも
いないからだ。



た。人が知らない何かを知っているみたいでした。大抵の人が、ほほえみながら廊下を歩いているのです。どうして、あんなにいつも楽しそうなのかしらって、なんだか不思議になりました。」

彼女は親友のコートニー・ハルから早朝セミナーに誘われて、その答えがわかり始めました。こう話しています。「友達が行ってるから行っただけなんです。それから若い女性や教会の集会に顔を出すようになり、ほかのいろいろな活動にも出席し始めました。皆とても親切でした。やがて、教師の教えていたことをまじめに聞くようになりました。そしてある日、これは自分に必要なことなんだと気づいたので。」こうしてスーザンはバプテスマを受けました。

「私には教会員でない友達が大量います。教会に入ってから相変わらず仲良くしています。でも、末日聖徒と一緒にいると、良くない圧力は受けないし、嫌なうわさ話も耳に入って来ないし、お酒も飲みません。」今スーザンは、末日聖徒の生徒たちがなぜいつも楽しそうに見えるのか、納得しているようです。「福音のおかげだったんですね。」

フェアバンクスに住んでいる人々にとって、いつもにこにこしているのが必ずしも最善の生き方だとは言えないこともあります。それは、歯の矯正用ブレースを口にはめて冬の戸外に出る

ときです。金属製のブレースに、唇が凍えてはりついてしまう心配があります。この地の冬の寒さは、シャワーを浴びて湿ったままの髪で外に出ると、髪の毛が凍って折れるほどなのです。

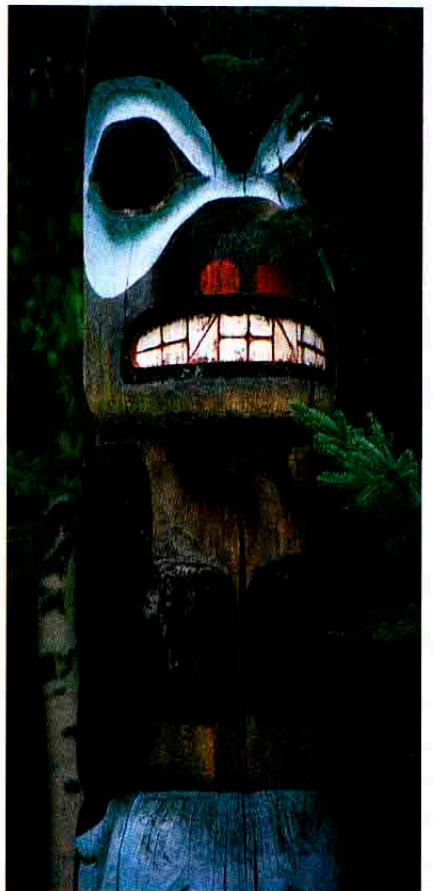
その一方で、夏はほぼ24時間ずっと日光が降り注いで暖かです。夏のことを尋ねれば、また評判の笑顔が返ってくることでしょ。「夜がないんですよ」と、だれかが答えてくれます。「暗くならないうちに帰りなさいって、親に言われたら、翌朝帰ってもいいんです」とジョークが飛びます。

「夏を何げなく過ごすなんて考えられませんよ。思いつく限りのことをします」と言う人もいます。

別のひとりがこう付け加えました。「夏という季節は短いんだから、何かをし残したら、後味悪いですよね。」

フェアバンクスの末日聖徒の若者たちには、福音と人生に対する確かな情熱があります。また、この地域は賃金が総じて高く、収入が得やすい所でもあります。そのため、愛や家族の価値、あるいは霊性の代わりに、お酒や有害な薬物、性的または物質的な事柄に心を向ける若者も多いのです。そんな中で、末日聖徒の十代の若者たちは、常に協力し合いながら、人々に手を差し伸べています。アラスカの荒野の中心部、この町の真ん中に、彼らは狭いながらも居心地のよい自分たちの場所、「モルモンコーナー」を作ったのです。

□





もう一度、愛を込めて

リベカ・ストランド・ルソン

その年のクリスマスは、それまでで最高のものになるはずでした。夫のジムが年初めに歯科大学を卒業したのです。私たちはジムが歯科医院をすぐにも開業して、たくさんお金を稼ぎ、すてきなクリスマスを迎えられるとわくわくしていました。新しい服に、新しいクリスマスの飾り、オープンからはフルーツケーキの焼けるこぼしい香り。プレゼントも皆にあげよう。そんなことを思い描いていました。

ところが、何か月もの間、混乱した生活が続いたので。住み慣れたアパートや親しい友人たちから離れて違う土地に引っ越すということが、こんなに大変だとは思ってもみませんでした。引っ越しのために、わずかばかりの貯金も使い果たし、請求書がたまっていきました。

そんな時に、私は2番目の子供を身ごもり、流産しそうになりました。そして、行動も厳しく制限されました。ジムは医院を開業する準備で毎晩遅くまで働いていて、いつまでたっても帰って来ないように感じられました。確かに家に戻ったときのジムは明るく、良い伴侶でしたが、この時期ほど寂しさを感じたことはありませんでした。

11月になってようやく開業にこぎつけました。予定より1カ月遅れたために、請求書の支払いが滞っていました。年初めのころ私たちは、このころまでには新しい患者さんから診察料が入ってくるので何とかなるだろうと思っていたのですが、そううまくはいきませんでした。食べる物を買うお金もないくらいで、余計な出費などでできません。

クリスマスが近づくにつれて、私はだんだんと憂うつになってきました。少ない家計をやり繰りして、1歳半になる息子のエリックに童話の本とおもちゃを買ってやることにしました。「ツリーの下のプレゼントなんてそ

んなに重要じゃないわ。大切なのはクリスマスの精神なのよ」と自分に言い聞かせました。とは言うものの、そのクリスマスの精神を少しも感じられずにいました。

童話の本とおもちゃを包んで、中古で使い古された作り物のクリスマスツリーの下に置きました。ボール紙でできたキリスト生誕の置き物や、不釣り合いな飾りを部屋に飾りました。

クリスマスの朝がやって来ました。エリックをツリーのところに連れて行ってプレゼントを開けさせました。エリックがプレゼントを開ける姿を見て、私は悲しみが胸が詰まりました。期待していた喜びはどこにあるのでしょうか。

その時です。ジムが私の肩に腕を回し、小さな包みを私のひざに載せました。震える指で包装紙をはがすと、真っ赤なベルベットの小箱が出てきました。まさかとは思いましたが、高価なものでなければこんな箱に入れないはずです。ジムはどこからそんなお金を手にいれたのでしょうか。

箱を開けてみると、心臓が止まりそうになりました。中には、私たちが結婚する前に、少し早いクリスマスプレゼントとしてジムがくれたペンダントが入っていました。「もう一度、愛を込めて。ジム」と書き添えてありました。

そのペンダントが、私へのジムの愛情を表わしているのだと思うと、涙が込み上げてきました。心の痛みも消えて、言葉では言い表わせないほどの愛と喜びに満たされました。私もついに、クリスマスの精神を感じることができたのです。

あのクリスマスの朝に、愛の深い夫が教えてくれた教訓を、私は決して忘れないでしょう。そう、愛はすべてに勝る贈り物なのです。□



キリストの降誕を 証する人々

ジョセフ・フィールディング・マッコンキー

「それは、片すみで行われたのではないのです……。」(使徒26:26)キリストが地上で行なわれたみ業について、使徒パウロはこう言っています。実際、救い主の降誕を証する人々の数は多く、その立場も様々です。

アメリカ大陸では、レーマン人サムエルが救い主の降臨のしるしについて予言しています。(ヒラマン14:3-6参照)さらにアルマは、キリストの降臨は天のみ使いたちによって、「聖くて正しい」(アルマ13:26)人々に告げ知らされるであろう、と記録しています。キリストがお生まれになった国では、主の降臨の証の輪が次々に広がっていきました。とりわけ、主の戒めと儀式を守り続け、聖霊に満たされていた人々の間ではそれが顕著でした。

たとえば、福音書の著者であるマタイとルカは、キリストの降誕について12組の証し人の記録を残しています。これらの証し人たちの証言は、それぞれに優れたものですが、それらがひとつとなって、キリスト誕生についてさらに力強い証を形成しているとも言えます。そうした物語をひもとくたびに、それぞれが実に適切な箇所に適切な形で書かれていることに気づきます。とりわけ、マタイとルカがそれぞれ異なった視点から一連の話を記録していることを考えると、一層その感が強まります。

キリスト誕生の物語は、神殿の聖所の中で、祖国のた

めに救い主の降誕をまさに祈り求めていたひとりの祭司にみ使いが現われたところから始まります。そして、ヘロデが幼な子キリストの命を奪おうと非情な命令を出したところで終わります。このキリスト生誕の物語には、祭司か一般の信者かにかかわらず、また老若男女、身分の高低にかかわらず、多くの人々に、もろもろの天が開かれたことが書かれています。

一つ一つの出来事が、歴史上最も美しいこの物語の、大切な証となっています。

ガブリエル

新約聖書でキリストの誕生を最初に証した人は、神のみもとから遣わされたガブリエルです。このみ使いが、最初に神殿の中でアロン神権の忠実な祭司であったザカリヤに姿を現わしたのは、実にふさわしいことでした。ザカリヤはこの時、イスラエルの民を代表して、聖所の祭壇で香をたいて儀式を行なっている最中でした。

この職務を果たすに当たって、ザカリヤは、信仰で心をひとつにしたイスラエルの民を代表する立場にありました。つまりザカリヤの祈りは、約束されたメシヤの手によって、あらゆる敵から永遠に解放されることを願う民の祈りでもあったのです。香から立ち上る煙は、ひとつとなった祈りが天へと上っていく象徴でもありました。



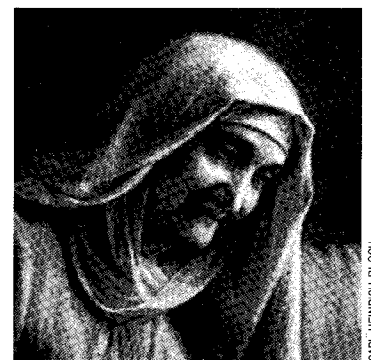
CARL HEINRICH BLOCH

ガブリエル



JAMES T. TISSOT

ザカリヤ



CARL HEINRICH BLOCH

エリサベツ

ザカリヤが祈ると、同じ業に携わる祭司たちや神殿の囲いの内側にいる人々は皆、ザカリヤの嘆願の祈りに合わせて、アーメンと唱和するのです。

イスラエルの民の祈りにこたえて、「主の御使」がザカリヤの前に現われ、香壇の右側に立って「わたしは神のみまえに立つガブリエルであ[る]」、と告げました。(ルカ1:11-19参照)近代の啓示を通じて、ガブリエルとはノアのことであって、「神権の権能においてアダムの次に位置している」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.157)者であり、また「すべてのものを原に復す鍵」(教義と聖約27:6-7)を持つ者であることがわかっています。

ガブリエルはこの鍵のゆえに、エライヤスとしての任務を受けていました。すなわち、主のみ前に道を備える者となっていたのです。ですから、ガブリエルがバプテスマのヨハネの誕生を告げ知らせたことは、確かにその職にふさわしい働きであったと言えるでしょう。なぜならヨハネは、地上におけるエライヤスとしての任務を受けて、メシヤの道を備えることになっていたからです。

ザカリヤ

ガブリエルの訪れを受けたこのザカリヤとは、どのような人物だったのでしょうか。彼は妻のエリサベツと同様、「聖くて正しい」(アルマ13:26)者のひとりでした。また、アビヤの子孫であり、ザカリヤという名前には「エホバを忘れぬ者」という意味がありました。エリサベツも、ザカリヤと同じように、祭司の子孫であり、(ルカ1:5参照)その名前には「神に清められた者」と

いう意味がありました。

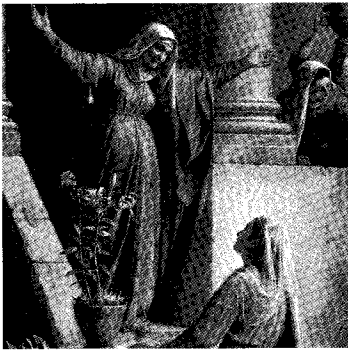
この気高い夫婦には、子供が授かると約束されましたが、その子供はメシヤの降臨に備えて、この地上における先駆けとなると言われました。ところが、ザカリヤはガブリエルが与えた約束の予言の言葉を信ぜず、そのためひとつのしるしが与えられることになります。「この事の起る日まで、ものが言えなくな」って(ルカ1:20)しまったのです。

やがて、「エリサベツは月が満ちて、男の子を産」みますが、ザカリヤのものの言えない状態はその時まで続きます。こうしてザカリヤの「口が開けて」、新しく生まれた自分の息子の神聖な使命について証を始めました。「主のみまえに先立って行き、その道を備え」る、と予言したのです。この一連の奇跡的な出来事の一部始終は、「ユダヤの……至るところに、……ことごとく語り伝えられた」のでした。(ルカ1:57, 64, 76, 65参照)

エリサベツ

ヨハネについては、「母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされて」(ルカ1:15)いたと、記録されています。それは実際に、「エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。エリサベツは聖霊に満たされ[た]」(ルカ1:41)と記録されたほどでした。

神の清い器であったエリサベツも、自分の息子に特別な使命が託されていることをはっきりと認識し、かつマリヤの息子が神の御子であることを証して、次のように声高く叫びます。「あなたは女の中で祝福されたかた、



胎内で喜び躍るバプテスマのヨハネ



マリヤ



ヨセフ

あなたの胎の実も祝福されています。

主の母上がわたしのところにきてくださるとは、なんという光栄でしょう。」(ルカ1:42-43)

エリサベツは、「主のお語りになったことが必ず成就する」(ルカ1:45)と予言して、証を終えています。つまり、神の御子がお生まれになることを高らかに宣言して、かつてそのことを予言した人々や、なお予言し続けている人々の証に、自らの証を加えたのです。

バプテスマのヨハネ

キリストがダビデの王国の正当な世継ぎとしてお生まれになったように、ヨハネもまたエライヤスの職の正当な継承者としてこの世に生を受けました。ですから、ヨハネが、まだ母の胎内にいるうちから喜びに躍る(ルカ1:41, 15参照)ことによって、「主のみまえに先立って行き、その道を備え〔る〕」(ルカ1:76)という神聖な業を開始したのは、実にふさわしいことでした。

それは本当に奇跡のような出来事だったことでしょう。ヨハネは喜びに躍り、エリサベツは予言のみたまに満たされて、いとこのマリヤを迎え、マリヤも同じみたまに満たされてそれにこたえたのです。私たちはここで、証し人たちとその証の持つ力がひとつとなったときの比類のない強さに注目する必要があります。奇跡的に子を宿していた、老年のエリサベツと若きマリヤというふたりの女性の証がそれです。このふたりの女性、そしてまだ胎内にいるヨハネまでが、偉大な出来事がまさに起ころうとしていることを知り、こぞって大いに喜んだのでした。

マリヤ

キリストが神の御子であることを証するに当たって、母親のマリヤ以上に完璧な証し人が存在するとは考えられません。マリヤはガブリエルから、「いと高き者の子」(ルカ1:32)を身ごもると約束されました。この奇跡的な出来事後、マリヤは証をして、「力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく……」(ルカ1:49)と言っています。

ニーファイはこのきわめて神聖な出来事について、聖典にさらに完全な記録を残しています。「私はそれからその処女が『みたま』につれて行かれるのを見た。その処女が『みたま』につれて行かれてからしばらくして天使が私に『見よ』と仰せになったから、

私が眺めると、その処女がまた見えてこのたびは一人の幼児を抱いていた。

天使が私に『神の子羊、まことに永遠の父なる神の御子を見よ……』と仰せにな〔った。〕」(I ニーファイ 11:19-21)

まことにマリヤは、ガブリエルが告げたとおり、「恵まれた女」(ルカ1:28)として、こうした数々の奇跡を自ら体験し、救い主を産んだのでした。

ヨセフ

ヨセフが語った言葉は聖典にまったく記録がありません。しかし、ヨセフが正しい人であったことと、特別な事情が生じたマリヤに対して見せた反応とを考えると、ヨセフもまた、キリストが神の御子であることを確信し



羊飼



天の聖歌隊



シメオン

ていたことがはっきりとわかります。また、ヨセフが夢を見たり、み使いたちから指示を受けていたこともわかっています。さらに、モーセの律法を忠実に守っていたからこそ、天から受けた指示の一つ一つに忠実に従おうとしていたのだということもわかります。

「主の使が夢に現れて……、『ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである』（マタイ 1：20）と言った時、ヨセフは、すでに身重になっていたマリヤを妻として受け入れ、一点の疑念も抱かないほどの従順さを示しました。ヨセフはまた、「子が生れるまでは、彼女を知ることはな〔く〕」（マタイ 1：25）、生まれた子をイエスと名づけました。さらに夜の間にマリヤと幼な子を連れてエジプトへ行き、戻ってよいという指示があるまでエジプトにとどまりました。そしてユダヤではなく、ガリラヤに戻りました。（マタイ 1：19—20； 2：13—23参照）

こうしたヨセフの一連の行動はみな、イスラエルの望みであり神の御子であるこの幼な子について、ヨセフが信仰を持っていたことを証しています。

羊飼いたち

キリストがベツレヘムの馬小屋でお生まれになった晩のこと、羊飼いたちは、近くの野で羊の群れの番をしていました。この羊飼いたちは普通の羊飼いではありませんでした。み使いたちがメシヤの誕生というよきおとずれを伝えるのは、「聖くて正しい」（アルマ13：26）者たちであると、ニーファイの民の中で予言されていたから

です。

この羊飼いたちは、自分たちが授かった特別な証を家族や友人、隣人にも伝えました。また、この羊飼いたちの体験は神殿の中庭でも繰り返し語られ、やがて、そこから全世界の民に伝えられたのでした。ルカの記録によれば、羊飼いたちは「飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあて、……この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた」（ルカ 2：16—17）とあります。あの聖なる夜に、この羊飼いたちの前に立つみ使いが伝えた「大きな喜び」のおとずれは、「すべての民」（ルカ 2：10）に伝えていかなければならないのです。

天の聖歌隊

み使いが羊飼いたちに救い主の誕生を告げ知らせた直後、「たちまち、おびたしい天の軍勢が現れ、……神をさんびして言った。」（ルカ 2：13）天の聖歌隊は、ユダヤに住む謙遜な羊飼いたちに向かって、こう歌います。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。」（ルカ 2：14）このようにして、天の聖歌隊は音楽を通じて、散らされたイスラエルの子孫たちに、救い主の誕生を告げ知らせたのでした。

シメオン

さて今度はエルサレムに目を向けてみましょう。このころ、エルサレムには、ルカの記述に従えば、「正しい信仰深い」（ルカ 2：25）ひとりの老人が、救い主に会う



アンナ



博士たち



ヘロデ

までは死ぬことはないという約束を主からいただいていた。この老人が聖霊の導きを受けて神殿に行くと、そこには幼な子キリストがいました。

幼な子とその両親が神殿に入ってきた時、——マリヤは清めの儀式を受けるために、そしてヨセフは律法に従って初子を聖別するのに必要な捧げ物をするために神殿に来たのです——シメオンはその幼な子を抱き上げ、こう言いました。「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおり

にこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。

この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります。」(ルカ 2 : 29—32)

シメオンの言葉は、祖国の民からはほとんど理解されず、また民の望みとはかなり隔たっていました。それは、シメオンがキリストのみ業は全世界の民のためのみ業であることを知っていたからです。シメオンは、イエスがユダヤ人にとっても異邦人にとっても同じように救い主であることを証したのです。

アンナ

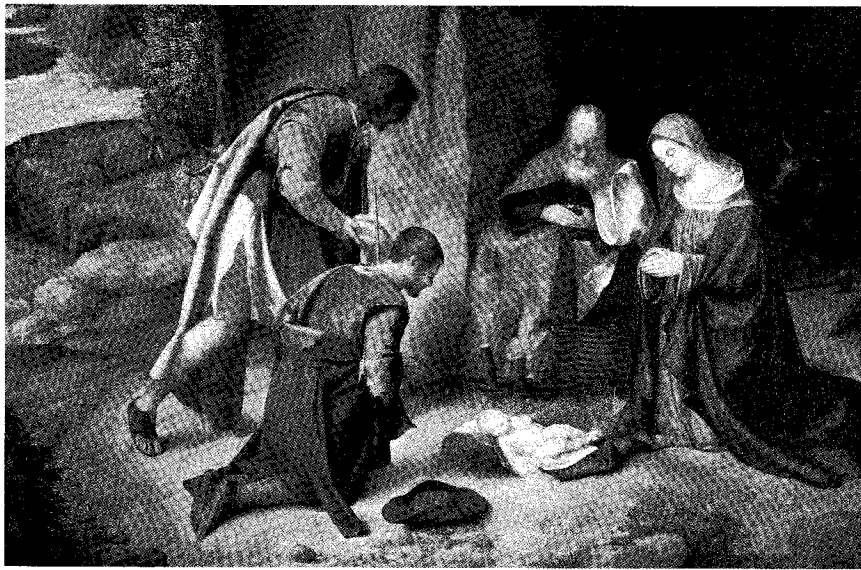
シメオンのこの不思議な証を支持する人がまったくいなかったわけではありません。キリストの誕生について述べたシメオンの特別な証に、さらに証を加えたのが、アンナです。この老齢の寡婦の名前は「恵みに満ちた者」という意味です。この献身的で忠実な女性は、長年の間、昼も夜も、断食と祈りをもって神殿で神に仕えていました。熱心にメシヤの降臨を待ち望んでいる聖なる

都の人々の間で、アンナはよく知られていたはずですが。アンナはこの聖なる家族に近づくと、エルサレムの「救を待ち望んでいる」(ルカ 2 : 38)すべての人々に、メシヤの誕生を証しました。

東から来た博士たち

救い主の誕生後しばらくして博士たちが訪ねてきた、と記録しているのはマタイだけです。「東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った」(マタイ 2 : 1)とあります。この博士たちが当時の政治状況については無知であったことがよくわかります。キリストのお生まれになった場所をヘロデに尋ねているからです。「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。」(マタイ 2 : 2)ヘロデの性格をよく知っている人なら、そのような質問をヘロデに直接することによって、キリストの生命を危険にさらすようなことはしなかったでしょう。

また、この博士たちが示現を見る人たちであることもわかります。神から「夢でヘロデのところへ帰るとのみ告げを受けたので、他の道をとって自分の国へ帰って行った」(マタイ 2 : 12)からです。また、ジョセフ・スミス訳の聖書から、この博士たちが「ユダヤ人のメシヤ」を探し求めてやって来たことがわかります。こうして博士たちも、神の御子を探し求める人々に御子のことを証させる、「証人の律法」(II コリント 13 : 1 参照)に従ったのです。



羊飼いの祈り ジョルジョーネ画 ワシントン・ナショナル・ギャラリー サミュエル・H・クレスコレクション。

「それは、片すみで行われたのではないのです……。」(使徒 26：26)キリストが地上で行なわれたみ業について、使徒パウロはこう言っている。実際、救い主の誕生を証する人々の数は多く、その立場も様々である。

ヘロデ

最後の証し人は、考えるのもおぞましい人物、つまりイスラエルの王であったヘロデ大王です。当時ヘロデは世界の列強と同盟を結んでいました。友人といえば、ローマのアウグストとその友軍だけでした。ヘロデは祭司や貴族を虐殺し、サンヒドリン(ユダヤの議会)の議員を多数殺していました。また、大祭司であった自分の義弟を、自分の慰みに目の前で溺死させました。さらに、自分の愛妻のマリアンメを絞殺するよう命じました。おそらく、ヘロデが愛した人はこの妻だけではなかったのかと考えられていたにもかかわらずです。ヘロデに疑いを持たれた人物は皆、殺されました。その中には3人の息子や数多くの親族もいます。

いわば、世界中の悪が人の姿をまとして現われたようなこの人物に、東から来た博士たちは、イスラエルの正統の王であり統治者であるお方がお生まれになったと証したのです。シメオンやアンナ、無学な羊飼いたちの言葉であれば、ヘロデはまったく耳を貸さなかったかもしれません。しかし、この東からの来訪者の証は信じました。博士たちは見るからに大いなる知恵を持つ人物であることを物語っていたからです。

神の王国は、サタンが権勢を誇るこの世にあっては、絶えず苦難を抱えながら前進していきます。神の御子がお生まれになった時、地獄で怒りがあったために、かえって救い主誕生の物語は欠けたところのないものになっています。天のよきおとずれは、決して暗黒の君やその従者たちに喜びをもたらすことがないからです。博士たちの証を聞いたヘロデは、サタンに従う者として、残忍

な怒りの心で幼な子キリストを殺そうと画策しました。こうしてヘロデは、博士たちから確かめた時に基づいて、「ベツレヘムとその附近の地方とにいる二歳以下の男子の子を」ことごとく殺すよう命じたのでした。(マタイ 2：16)

そのほかの証し人たち

このようにイエス・キリスト降誕の物語には、12の立場の人々が登場して救い主の誕生について証しています。それを読むと、神の知識がどのようにして回復され、また再び全地のあらゆる民に伝えられていくのかという、天の方法がよくわかります。

では、具体的にどのようにして伝えられていくのでしょうか。特別な証し人によって伝えられていきます。天上の大会議で召され、備えられた証し人たちがその役割を担うのです。では、その証し人とはだれでしょうか。年齢を問わず、性別を問わず、学識の有無を問わず、「主の戒めと定めとを、みな落度なく行って」(ルカ 1：6)歩んできた人々、導きとなる夢を見、み使いから教えを受け、聖霊に満たされている人々、そうした人々がその証し人です。昔からそうであったように、これからもそういう人々が証し人として立たなければならないのです。

*ジョセフ・フィールディング・マッコスキー——ユタ州、ブリガム・ヤング大学で宗教教育の教授を務めている。



ベツレヘムの羊

「さて、……羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。
すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照した……。」(ルカ 2 : 8—9)



OYEUX NOËL GLEDELIG JUL

HYVÄÄ JOULUA **メリークリスマス**

VROLIJK KERSTFEEST GOD JUL

GLÆDELIG JUL FELIZ NAVIDAD

즐거운 성탄절 **MERRY CHRISTMAS**

IA OAOA I TE NOELA MANUIA LE KERISIMASI

BUON NATALE GLEÐILEG JÓL **聖誕快樂**

สุขสันต์วันคริสต์มาส FRÖHLICHE WEIHNACHTEN

SELAMAT HARI NATAL KILISIMASI FIEFIA

FELIZ NATAL!

飼い葉おけに横たわられた主

アジア北地域会長会第一副会長

ハンインサン
韓仁相

束縛と困難の生涯を送りながら、多くの予言者たちがキリストについて予言しました。このキリスト、すなわちメシヤが来ることを待ち焦がれていた当時のユダヤの民は、万軍の主であり人類の救い主であられるお方がこの世に來られる姿と状況を想像するたびに、華々しく輝かしい、誉れに満ちた光景を考えていたかもしれません。

しかしそのお方はエルサレムから南に約8キロ離れた小さなユダヤの地、ベツレヘムでお生まれになりました。宿屋に、身重の母親マリヤの泊まる部屋がなかったので、みすばらしい馬小屋に泊まっていた間のことでした。(マタイ2：1-12参照)聖書には、マリヤは「初子を産み、布にくるんで、飼い葉おけの中に寝かせた」(ルカ2：7)と記録されています。

私たちの救い主であられるイエス・キリスト、救いと永遠の生命を得る機会を全人類に与えられたイエスは、人間としてこの世に生まれるという、実に謙遜な方法を通してこの世に來られました。

「時の絶頂」という短い期間にみ業を終えられたキリストは、人間によって糾明され、最も謙遜かつ悲惨な方法で十字架にかかれ、人類の罪を背負われました。キリストは、ガリラヤの海辺や山の上で、また野原や会堂で、ご自身に従う者を教える時、いつも模範と愛、忍耐と寛容、そして親切により教えられました。

キリストは、この宇宙の主であり万物の父である神、すなわちエロヒムの独り子でした。しかし、その偉大な権威と力を、この世の人々を導くうえで、迫害する者たちに接するうえで、世俗的に用いたことはありませんでした。

私たちが住んでいるこの小さな地球には様々な国があります。大きな国も



あれば小さな国もあります。また世の中には大小の組織がたくさんあります。国や組織の中では権威者が、常に自分の権力を世に誇示しようと努めています。そして、その世俗的な力を利用して組織を運営したり、人々を治めたりしようとしています。おそらく、人類の歴史がそのような動機によって動かされてきたために、地球上に戦争の絶えることがなかったのかもしれませんが。今も私たちは戦争のうわさを耳にします。国家間の戦争もあれば、同じ民族同士の戦争もあり、国のためという名目のもとに戦う同胞同士の戦争もあります。

この世にお生まれになり、ベツレヘムのある馬小屋の飼い葉おけに寝かされているイエスを、見る事ができたなら、私たちは多くの事柄を学べるでしょう。心が謙遜になり、自分の権威や権力を行使しようとはしなくなるでしょう。しかも、そのような力は錯覚でしかないのです。

キリストよりも偉大な人がいるでしょうか。神の独り子であるお方がへりくだり、馬小屋の飼い葉おけに横たわられたとしたら、私たちはどうすべきでしょうか。私たちが、心にわき出る体裁や虚栄心、名誉やたまえにとらわれる時、みずから飼い葉おけに横た

われたキリストに背いていることにならないでしょうか。

もろびと、こぞりて 迎えまつれ
久しく待ちにし
主は来ませり 主は来ませり
主は、主は来ませり

しほめる心の 花を咲かせ
恵みの露置く
主は来ませり 主は来ませり
主は、主は来ませり

(『もろびと、こぞりて』賛美歌116番、1節と3節)

キリストの誕生を祝うクリスマスを迎えました。たとえ私たちに足りない部分があろうとも、一緒に賛美歌を歌い、少しでも主に近づき、主に似た者となるように努力するならば、私たちは真の末日聖徒になれることでしょう。

「御使は言った、『^{みづかい}恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。』

きょうダビデの町に、あなたがたのために^{すくいぬし}救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼い葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。』

するとたちまち、おびたしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に天の神をさんびして言った、

『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなる人々に平和があるように。』(ルカ2：10-14)

兄弟姉妹の皆さんに、クリスマスのあいさつを送るとともに、このクリスマス、そして続く新年に、皆さんの上に喜びと主の栄光、平和がとどまるように祝福いたします。□

独身成人への 勧告

結婚は正しい目標である

結婚適齢期に達している成人男性は「完全な女性」にまだ出会っていないからと言って結婚を遅らせるべきではない。また結婚適齢期の女性も、職業上の目標、教育または生活を変えたくないなどを理由に、結婚を遅らせるべきでもない。こう語るのは十二使徒評議会会員マービン・J・アシュトン長老である。

しかし長老は、「結婚するためだけの」結婚は避けるべきであって、「結婚は愛と共通の価値観に基づくべきなのです」とも述べた。去る8月30日にテンプルスクウェア内のタバナクルで行なわれた独身成人対象の衛星中継ファイヤサイドでの説教である。

大管長会のゴードン・B・ヒンクレー第一副管長とトーマス・S・モンソン第二副管長がファイヤサイドを管理し、モンソン長老が司会を担当した。

アシュトン長老は説教の中で、教会の独身成人会員は「日々、目的を持って生活し……奉仕、教育、人格形成、人に対する愛、そのほかの有意義な事柄で充実した生活を送るようにしてください。もし、ふさわしい結婚をまだしていないからといって自分を敗者のように考えているとしたら、それは間違っています。

結婚適齢期のどの時期にあってもそうですが、多くのことができる状況下にながら、何もせず待つばかりの生活を送らないでください。価値ある交際や奉仕を通して、さらに自己達成、個人的な成長、自尊心が得られるように努めてください。

結婚を正しい目標として掲げると同時に、自らの将来の見通しも維持するようにしてください。自分にないものを数え上げるのではなく、自分に与えられているものに心を向けてください」と勧告した。

また率直に、次のようにも語った。「私は今晚、皆さんの前ではっきりと申しあげます。私にとって最もむずかしいのは、結婚適齢期にあり、立派に成人していながらも、結婚を遅らせ、後回しにし、人生の中でも永遠の時の流れの中でも重要なこの時期をおろそかにしている男性諸君に、我慢しなくてはならないときです。

結婚適齢期の成人男性の皆さんに、悔い改めを求めます。悔い改めの日を引き延ばさないでください。あなたにはふさわしい女性がいて、主がその女性を見いだせるように助けてください。どうか私たちの言葉を信じてください。

私は『完全な女性』を見つけていない結婚適齢期の成人男性に対し寛容ではられません。このような男性自身も実は『完全な男性』ではないようです。心から幸福で充実した価値ある人生を望むなら、自分自身と独身の女性をもっと現実的に見るように提案します。」

アシュトン長老は、言い訳のある人、ふさわしい女性との交際が成就しなかったと言う人もいるかもしれないが、「率直に申します。永遠の伴侶を持つことから得られる適応、順応、成長をいつまでも遅らせる理由など、見あたりません」と述べた。

またやはり独身の姉妹たちにも、ふさわしい伴侶が得られるよう努力しなくてはならないと、アシュトン長老は語っている。

「『ああ、また指導者が独身者に言ういつもの話ね』と思いながら聞いてい

る方々、アミュレクという言葉思い出してください。

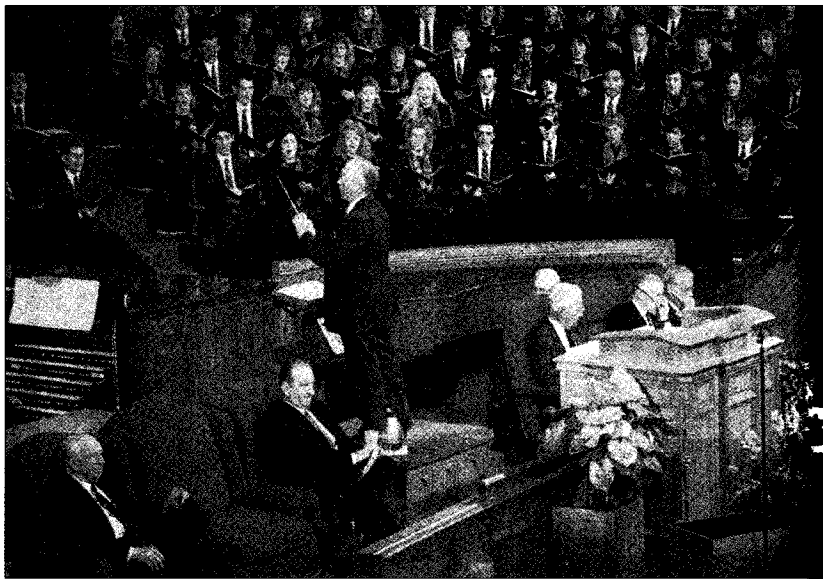
『ところが私は心をかたくなにしてたびたび呼ばれても聞き従おうとしなかった。それであるから、これらのことが確^{たしか}にあることを知りながら、これらについて知りたがらなかった。』（アルマ10：6）

兄弟姉妹の皆さん、私たちは皆さんを愛しており、皆さんの幸福を願っています。ですから私たちは主の道を教えようと必死になるのです。私たちの言葉を聞く耳を持つか持たないかは、皆さんの選択です。皆さんが天父の導きを求めて、自分にとって何が正しいかを理解し、それを実行できるようにお祈りいたします。」

アシュトン長老はふさわしい人物になることの大切さについて語った。ふさわしい人物とは、以下のような様々な価値ある特性や特質を備えた人を指す。

1. 自尊心を持ち、身なりの整っていることに満足し、高い標準や奉仕の目標に向かって努力し、自己を訓練し、標準や信条について妥協しない。
2. 誠実であり、深い信頼にこたえるふさわしさを保つ。
3. 気分を平静に保ち、狭量さを避ける。
4. 愛し、愛される能力を伸ばす。
5. 不平を言わない。人の欠点を探したり、批判したり、卑下したりしない。口うるさくしない。
6. 真の信仰を養う。真の信仰があれば、神との意義ある関係を深めることができる。

Photo by Don Grayson



アシュトン長老は次のようにも語った。「私たちは適切な優先順位と目的を持って生活しなくてはなりません。自分をあまり厳しく評価しないように、むしろイエス・キリストの福音に添って生活しているかどうか、という観点から自分を計ってください。

しかし、確かに私たちは徳高い生活を目指して努力してはいますが、一方、正しくない自分勝手な標準を持つ、誤った相手と結婚するよりは、独身でいる方がはるかに痛みは少ないでしょう。私たちはこの点も認識しておく必要があります。

生活を正しく管理し、独身者という立場にあっても成功者となれるように、天におられる御父を知るように勧めます。天父を愛するようになってください。天父は皆さんを愛し、皆さんが望みさえすれば天父は必ず導きと励ましを与えてくださる、ということに常に忘れないでください。決断を下すとき、神を思い起こしてください。心の痛むとき、失恋の悲しみを味わうとき、神を思い起こしてください。自分を吟味するときにも、神を思い起こしてください。」

未亡人である中央若い女性会長会会長ジャネット・C・ヘイルズ姉妹は独身者に向けて、彼らのいらだちや、時折感じる腹立たしさを理解することができる」と語った。「身の回りのことを

すべて自分で処理しなくてはならない独身者に対して、2倍も多く時間が取れるなどという間違った発想はどこから来たのでしょうか。」

ヘイルズ姉妹は、教会の成人の35パーセントは独身であると述べ、「私たちは疎外感を持つべきではありません」と語った。

ヘイルズ姉妹は、良きサマリヤ人のたとえ話の解釈を中心に話を進めた。ここではサマリヤ人は救い主を指す。「キリストこそだれからも受け入れられず、ユダヤ人からさえもさげすまれました。そして、私たちが傷ついた者です。キリストは私たちを抱き上げ、傷の手当てを施し、宿屋へ運んでくださいます。そしてキリストは、私たちが介抱する人がいることを確かめるまで、立ち去りません。

宿屋の主人にお金を支払い、私の好きなこの言葉を言い残して行きます。『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います。』（ルカ10:35)

言い換えると、必要を抱えた人を助けるためには何も惜しまず、負債を払ってくださるのです。多くの独身者たちが心細い思いをし、傷ついたまま独り取り残されたように感じる時があります。しかし同時に、絶望に襲われたとき驚くほどの励ましを受け、愛に包まれたと証する人も少なくないのです。」

ヘイルズ姉妹はこの宿屋は「すばらしい象徴であり、仮りのあずまや、過渡期を過ごすための場所」であると述べ、宿屋は傷を癒し、保護を与えてくれる環境であると説明した。「それは霊的に新たな理解の目が開かれやすくなっているときでもあります。

ときには宿屋に留まることも必要ですが、宿屋を離れて旅立ち、天父に近づこうとするときに成長できるのです。

再び歩み始めるようになると、自分自身を正直に見つめ、障害物に注意しなくてはなりません。私たちは必ずしも他人の期待どおりに進歩するとは限りません。つまり、ときには足場の安全を確かめるために徐行し、荷物さえも減らす、という意味なのです。古い傷や失意をいつまでも抱えていては、なかなか目的地には到達できません。

前へ進み、堅固な生活を築くために努め、私たち一人一人がそれぞれの方法で宿屋の主人、すなわち主のみ業を喜んで行なう者となろうではありませんか。」

十二使徒評議会会員のジェームズ・E・ファウスト長老とM・ラッセル・バラード長老、七十人会長会のチャールズ・ディディエ長老、七十人のマーリン・K・ジェンセン長老、中央扶助協会会長、中央若い女性会長会もファイヤサイドに出席した。（「チャーチニュース」1992年9月5日付）

第3回国際美術コンテストのお知らせ

1994年第3回国際美術コンテストの開催に当たり、教会歴史美術館では各国の末日聖徒のオリジナル作品を募集しています。

今回のコンテストのテーマは「世界に広がる教会にあって福音を実践する」であり、作品は、末日聖徒の生活に根ざしたテーマ、価値観、活動、イメージを表現したものに限り、教会員が福音を実践していく方法に結び付いたテーマを表現してください。個人や家族としての生活の中で、あるいは末日聖徒として周囲とのつながりの中で、など様々な場面が考えら

れることでしょう。

応募作品は、絵画、版画、写真、彫刻、織物、陶芸、手芸、その他美術工芸全般を対象とします。作品は、縦、横、高さのいずれの寸法も2メートル13センチ以内とします。

1次審査のための募集要項と応募用紙は、地元の教会配送センターから入手できます。応募用紙に作品のスライドか写真を添えて、1993年10月31日必着で配送センターへお送りください。まとめてソルトレークシティに送られます。なおスライドと写真は返却されません。

最終審査に残った応募作品は、配送センター経由でソルトレークシティに送られます。入賞作品と美術館コレクションへの買い入れについては、教会歴史美術館の展示会で発表します。

1991年の第2回国際美術コンテストには、42カ国から800点以上の応募がありました。

この教会歴史美術館主催第1回国際美術コンテストは、1987年に開催されました。

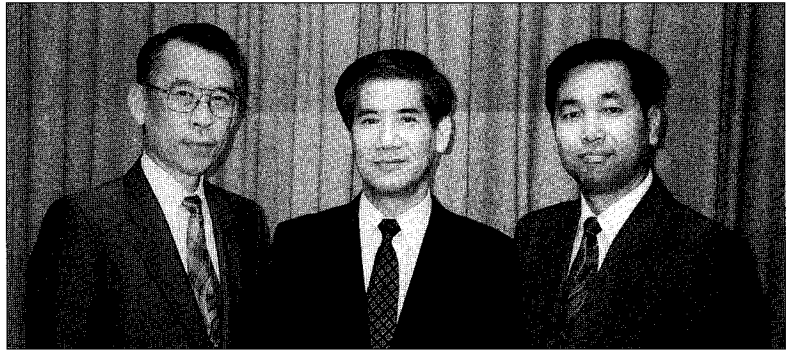
末日聖徒イエス・キリスト教会
配送センター
〒213
神奈川県川崎市高津区溝の口131
☎044-811-0417

再組織された 東京東ステーク部 ステーク部長会

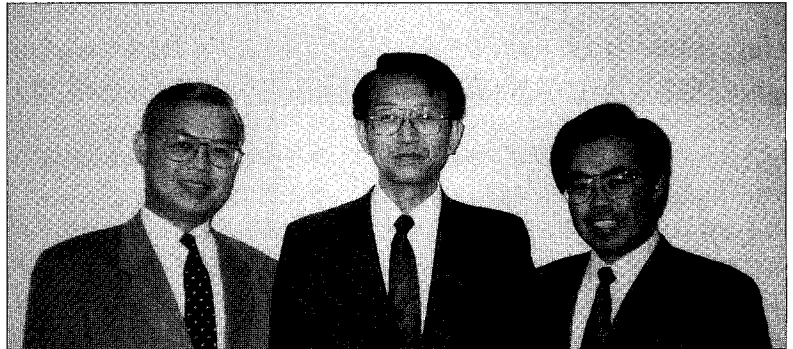
去る9月13日に開かれた東京東ステーク部大会でステーク部分割の支持がとられ、新たに我孫子ステーク部が設立されました。それに伴い、東京東ステーク部ステーク部長の責任を果たしてこられた赤松成次郎兄弟は、我孫子ステーク部ステーク部長に召されました。

東京東ステーク部ステーク部長には新たに細谷佐兄弟が、第一副ステーク部長には平野勝也兄弟が、第二副ステーク部長には岩永昌治兄弟が召されました。

なお、我孫子ステーク部第一副ステーク部長には宮下阿佐夫兄弟が、第二副ステーク部長には小森繁樹兄弟が召され、その任に当たります。



東京東ステーク部ステーク部長会——細谷佐ステーク部長(写真中央)、平野勝也第一副ステーク部長(写真左)、岩永昌治第二副ステーク部長(写真右)



我孫子ステーク部ステーク部長会——赤松成次郎ステーク部長(写真中央)、宮下阿佐夫第一副ステーク部長(写真左)、小森繁樹第二副ステーク部長(写真右)

多くの友を得て

東京東ステーク部ステーク部長
細谷佐

友を得ることは天に宝を蓄えることに似ていると思います。私にとって最良の友は妻の久海子姉妹です。彼女は永遠の伴侶であると同時に最高の助言者であり、そして手厳しい批評家でもあります。結婚して22年、絶えず私を励まし、支持してきてくれました。すばらしい子供たちにも恵まれ、信仰生活を通じて日々多くの経験を、共に成長できることをうれしく思います。

教会の召しを忠実に果たすことにより、多くの友を得てきました。私は教会の責任をいただくことはさらに多くの友を作り、また友のひとりに加えていただく絶好の機会でもあると考えます。教会の召しを通して義母の細谷興

子姉妹に出会い、それが娘の久海子姉妹との出会いにつながり、私の人生を大きく変えることになりました。これまでの人生を通じていただいてきた指導者や友人からの忠告や助言、友情に心から感謝します。

沖縄のコザ市(現在の沖縄市)にある私の生家の前には、あるキリスト教会の集会所がありました。中学校1年生のころから日曜日の朝は礼拝集會から流れてくる賛美歌を、ぼんやり2階の窓の手すりにもたれて聞いていました。時々休憩のために玄関先へ出て来る牧師と目が合ったりすると、慌てて目をそらせたりしました。心の内では礼拝に参加してみたい気がしましたが、なかなか実行できませんでした。兄がキ

リスト教系の大学へ行っていた関係で、聖書に興味を覚え、時々手に取って読んだりもしました。しかしとうとう1度もその教会へは行かないまま、中学校3年生の正月を迎えました。元旦に初もうでに行くとお宮の前で、きちんとした身なりの外人のひとりから、手書きの英会話のちらしを手渡されました。

3カ月後、高校1年生になった私は、クラスの片隅で静かに授業を受ける、特に何のとりえもない生徒でした。2学期の始めのころ、9カ月前にもらったちらしを思い出して、高校から歩いて3分ほどの所にあった教会の英会話のクラスに参加しました。それが終わった後、もうひとつの集會があるので出席しませんかと誘われました。20人ほどの小さな集まりでしたが、私にとって賛美歌を歌い、祈りによって始められる集會に参加した初めての機会でした。集會前半で聞いた話や、聖書の教えにとっても心を動かされたのを覚え

ています。当時MIA(相互発達協会)と呼ばれていた集会でした。

その後宣教師や教会員の親切に触れ、2ヵ月後の1959年11月14日、私は普天間支部でバプテスマを受け、新しい人生の出発をしました。それから私の生活に大きな変化が起きました。初めての責任はMIA会長会副会長でした。相互発達協会の名のおりに責任を通して成長する私の姿に、高校のクラスの仲間たちが大変驚いていたことを後で知りました。

翌年高校2年生になった私は、教会に入ってまだ半年ほどしか経っていませんでしたが、MIA会長会会長、日曜学校会長会会長の責任を、3年生になると地方部宣教師の召しをいただきました。学校では級長、新聞部部長、書道部部長を務め、生徒会長にも選ばれました。MIAで学んだ弁舌の技術を生かし、校内弁論大会で知恵の言葉について弁論し、宣教師の飛び入りの応援もあって、大好評を得たこともありました。こうしてたくさんの友人ができ、教会に興味を持った友人が毎週5人から10人は自発的に集会に出席してくれました。また地方部宣教師時代に「(友人を)紹介しよう会」と銘打った特別集会を企画し、46人の級友全員が参加してくれたことがありました。その中の8人は後にバプテスマを受け、ほかにも10人ほどの友人を改宗に導く機会がありました。

高校を卒業した翌年の1963年から約2年半、建築宣教師として奉仕をする機会に恵まれ、東京東支部(現在の小岩ワード部)、北部極東伝道本部増築工事(東京神殿の敷地にあった)、そして沖縄那覇支部の建物の建築工事に従事しました。伝道本部での作業中には思わぬけがをして入院し、その後の療養中には伝道本部の専任宣教師たちと共に働く機会に恵まれました。そこで当時宣教師であった新山靖雄長老(現在、地区代表の責任にある)と会い、たくさんの励ましをいただいたことを覚えています。また多くの建築宣教師の同僚たちを友として得ることができました。その中には現在七十人に召されている菊地良彦長老もいらっしやいました。

沖縄に転勤してからは、建築宣教師でありながら沖縄那覇地方部の副地方部長に召され、地方部長や副伝道部長の指導を受けて共に働きました。沖縄には米軍の軍人の会員が多くいたので、ほかの地域の宣教師と違って食事をごちそうになったり、服や靴のお古をもらったりと、1ドル360円時代の恩恵に大いにあずかったものでした。

現在母と呼ぶようになった細谷興子姉妹と巡り会ったのは、最初の任地の東京東支部でした。彼女は家族でひとりだけの教会員でしたが、毎週定期的に建築宣教師の宿舎に来て食事の世話や洗濯などの奉仕をしていました。それだけではなく、個人的にも食事に招待してくれたり、けがで入院していた私に見舞いに来てくれたり、沖縄に転勤した私に、伝道が終わって東京で勉強を続けるときにはぜひ自分の家に来るようにと勧めてくれたりしました。特にけがのことを心配してもらった時には、幼いころに母を亡くして母の顔さえ知らなかった私は、母親とはこんなにもやさしいものかと感動したものです。後になって知ったことですが、義母はこの時すでに、私を娘婿にしようとして決めていたそうです。

沖縄那覇支部の建築を終えた私は再び上京し、細谷家の文字どおり一員として居候をさせていただきました。妻が高校3年生、私が22歳の時でした。ふたりとも将来結婚しようと思っておりましたが、妻はまだ会員ではありませんでしたので、同じ家に住む妻にあて

て毎週福音について書いた手紙を渡していました。翌年の1966年、妻と義弟が改宗し、それから4年の月日を経て私たちは結婚しました。当時家族に気遣いながら私の世話をしてくれた義母や家族の一人一人、そして今は亡き義父に心から感謝しています。

教会へ入ってからの33年間を振り返ってみると、多くの友を得、友に支えられたことを感謝せずにはいられません。そして今ステーキ部長の召しをいただき、さらに友を増やし、友情や兄弟愛を深める機会を持つことができますことを深く感謝いたします。愛する平野勝也兄弟、岩永昌治兄弟のふたりのすばらしい副ステーキ部長、そしてステーキ部やワード部で働いてくださる多くの神権指導者やご家族に心から感謝申しあげます。またこれまでステーキ部を支え、大きく築いてくださった前ステーキ部長会の方々や兄弟姉妹たち、地区代表、伝道部長、宣教師の一人一人に感謝いたします。

最後に、私の人生にあって、多大なる愛をもって導き、励まし、助けてくださった兄弟姉妹たち、教会管理本部で共に働く上司や同僚の愛と模範、そして心から愛する家族に支えられてこのステーキ部長の召しを果たせることを主に深く感謝いたします。イエスキリストが救い主であり、この教会の大管長会および幹部の指導者が主によって召された方々であることを証いたします。(ほそや・たすけ)

細谷佐ステーキ部長ご家族



主の道具として

三重地方部四日市支部

杉本文代

もうどうしてあげることもできない。後は神頼みしかないね。」

1988年3月、病院の主治医から後5年の命と宣告された私は、どうしようもないほど落ち込んで駅の広場に座り、生まれて初めて人生について真剣に考えていました。「神様は本当にいるのだろうか。私はなぜ生まれて来たのだろうか。何のために生きているのだろうか。」

病身の父は、私が物心がついたころから家で養生をしていました。母は、生計を立てるために田畑を耕し、ひとりっ子の私は小さい時から学校をたびたび休んで母と一緒に農作業をしていました。

突然父が脳出血で他界したのは、私が14歳の時でした。私はすっかり気が動転してしまい、涙さえも出ませんでした。けれども何が起ったのかゆっくり考えている暇はありませんでした。放心状態の母に代わって葬式の手配から親戚間の様々な調整まで、一手に私が引き受けなければならなかったのです。

この時のショックのせいでしょうか。私は原因不明の難病にかかってしまいました。治療のために薬剤を大量に投与され、副作用で半年の間に体重が30キログラムも増えてしまいました。その後、投薬をやめても体重は一向に元に戻りません。高校を受験することもできず、中学校卒業後、2年間療養をしました。その後、看護学校に入学して病院実習までしましたが、医師から肉体的な限界を告げられ、18歳の時、2年間学んだ学校を後にしました。

病気は悪くなる一方で、原因がわからないためにそれ以上治療することもできず、約15年後、主治医にさじを投げられました。長い間、心に平安は得られず、いつもたくさんの悩みや苦し

みで押しつぶされそうでしたが、もはやそれも極限に達していました。

悲痛のために張り裂けそうな気持ちで駅の広場に座って人生の意義を考えていた時、ふたり連れの女性に声をかけられました。1度目はまるで気づかず、2度目に話しかけられてやっと目の前の出来事に心を向けることができました。「神様って本当にいると思いますか。私たちは何のために生まれ、また死んだらどうなるのか知りたいと思いませんか。」まるで私の心の中を見透かしたような質問に、とてもびっくりしました。

私は14歳の時から難病と付き合っているせいか、友達もとても重い病気で苦しんでいる人が多く、その人たちの

ほとんどがいろいろな宗教に頼っているのを不思議に思ってきました。もちろんいろいろな宗教に誘われましたが、なぜか好きになれず断わり続けていました。この時も教会の人だとわかって断わろうかと思いましたが、何かこの人たちと友達になりたいという気が強くなって、彼女たちの話を聞くことにしました。

最初の1カ月は、私がいかににもかたくなに宗教を拒絶したために、宣教師から福音を学ぶといっても、あまりはかどりませんでした。お祈りもしない、モルモン経も読まない状態でしたから進むわけはありません。そうしたある日、姉妹宣教師が「聖徒の道」を渡してくださり、家に帰るとそれが読

おぎす
小岐須峡谷でバプテスマを受けた杉本文代姉妹



みたくてたまらなくなりました。最初にローカルページの体の不自由なあるご夫婦の証が目に入り、朝方までかかって何回も読み返しました。そのご夫婦のあつい信仰が心の中までしみ入ってきて、かたくなだった心がすっと消えてなくなっていくようでした。

次の日起きるとモルモン経を読みたくて仕方がなくなり、さっそく読み始めました。お祈りもしてみました。とても良い気持ちを感じて心が平安になりました。モルモン経を読むと、教会に行つて宣教師に会いたくなりました。それからは質問があると、何でも宣教師に聞きました。「聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る」(モロナイ10：5)とあるように、私の心の中にも真理が少しずつ入ってきて、この教会が真実の主の教会であり、神様が生きておられ、モルモン経は真実神様の書物であつて、今の私たちのために備えられたものであることがわかりました。

2カ月後の1988年5月28日、私の望みがかなって、四日市支部から車で1時間半走つた所にある小岐須峽谷でバプテスマを受けました。前日から降っていた雨も上がり、凍るような冷たい水で生まれ変わることができ、まるでモルモンの泉でバプテスマを受けたような気がしました。それから2カ月間ほどは毎日、救われて生まれ変わっていくような気がし、主が共にいてくださるのを感じることができました。

バプテスマを受けた翌日から宣教師について街頭伝道を始めました。また求道者の時から先祖を救いたいと思つていたので、家族の記録の用紙を入手し、教えてくれる人もないままに記入を始めました。先祖の話は母も喜ぶので、親戚などで母に先祖の話聞いてもらつては、記録していきました。2カ月後には神殿で死者のための身代わりのバプテスマを受け、先祖が待っているという気持ちを強く感じました。

半年ほどで地方部宣教師の召しを受け、さらに伝道に励みました。編み物の仕事を宣教師の都合に合わせて調整して働き、改宗者も数人出ました。このころからどうしても専任宣教師として伝道に出たいと強く思うようになり、

面接も3度受けましたが、伝道に出る望みはかないませんでした。

バプテスマを受けて1年、待ちに待つた神殿参入の資格を得、自身のエンダウメントを受けました。主の宮居へ少しでも多く参入したい、また、1日も早く先祖を救わなければならないという気持ちから、以来毎月、多い時には月2回神殿に行つています。

1990年1月、私は神殿で奉仕する責任に召され、奉仕を続けてきました。そのため、せつかく神殿に行つても、自分で儀式を受けられないこともあり、奉仕をする時には喜びに満たされ、人からは神殿で奉仕をしている方が楽しくうれしそうで、元気そうに見えると言われます。

神殿から帰る時には東京の景色を見ながら、自然に涙が流れてきます。三重から東京に行つて神殿に参入するのは肉体的に非常に負担になるので、不安を払いのけることができなくなるのです。「今度また神殿に来れるだろうか」と。

しかし、神殿で奉仕し、儀式を受けることによって、私は多くの祝福を受けてきました。奉仕する責任に召されて間もないころ、つえがなければ奉仕できないほどひざが痛かつたのに、奉仕しているうちに痛みが取れたことがありました。エンダウメントの儀式では、永遠の真理や結婚についてなど、ほかのどこよりも多く主の教えを学ぶことができます。病気でつらい時があればあるほど、神殿に行きたくなります。神殿に行けば、病身の私のような者でも主からたくさん力をいただいて先祖の救いのために働き、奉仕できるので、また生活していくことができるからです。

神殿に参入し続けて3年半、今では家族歴史と神殿の業が私たちの救いに不可欠なものであるという証がますます強まっています。家族の記録も7代、150人以上の先祖のために提出し、身代わりの儀式を受けることができました。そして現在受けている地方部家族歴史スペシャリストの責任を果たすために、神様は不思議な助けをくださっています。ある時、ひとりの兄弟に、だれかが待っているような気がするの

で家族の記録を記入するようにと声をかけたところ、もう4代までの記録は提出しているからと断われました。それからしばらくしてその兄弟から連絡がありました。ひとりの先祖が夢に現われて、「私を救ってほしい」と訴えるので調べてみると、その先祖の記録はまだ提出していなかったことがわかつたのです。これに似たことは何度もありました。このように家族歴史を通して主のみ業に携わり、人の救いに役立てるのも、最初に私に福音を伝えてくれた宣教師が死者の救いのために働くよう強調して教えてくれたおかげです。本当に感謝しています。

仕える喜びは神殿でもよくいただきます。神殿で奉仕するだけでなく、宿舎に泊まっているときにも、たとえ初対面であっても神殿や家族歴史について質問を受けたり、個人的な悩み事を相談されたりします。夜通し悩みを聞くこともたびたびで、その後文通を続ける人もいます。「神が私たちの必要にこたえられるのは、普通の場合、別の人を通してである」(「聖徒の道」1975年8月号、p.339)と語られた、スペンサー・W・キンボール大管長の言葉が身にしみてきます。神が私に働くように望まれるときには、なぜか時間やお金に恵まれ、私が面倒をみなければならない体の弱つた母親の体調までが祝福されるのです。

みたまに導かれて主のみこころを行なった、助けを必要としていた人の役に立てた、こう感じるときの喜びと感謝の気持ちは何物にも換えられません。これからも主が私のような者でも使つてくださる限り、精一杯、死者と生者の救いのために働きたいと思つています。伝道に出て専任宣教師として働きたいという思いはいつまでも私の心の中から消えることはないと思つています。今は主の道具として様々な形で奉仕する機会が与えられていることに感謝しています。巡り会えた人々に私を通してこの真実の福音やイエス様の愛が伝えられるように、いつも主の光を心の中にいっぱい満たして生活していきたいと思つています。(すぎもと・ふみよ 地方部家族歴史スペシャリスト)

パナマのクーナ族へ33箱の救援物資

——東京南ステーク部扶助協会——

事の始まりは、1991年9月、東京南ステーク部渋谷ワード部の杉山洋二、敦子夫妻が、駐パナマ大使に就任した時でした。

就任後、しばらくして中米のパナマにいる杉山姉妹から、渋谷ワード部扶助協会会長会長の津田三枝子姉妹にひとつの頼み事がありました。

「パナマのサンラス島にクーナ族と呼ばれるとても貧しいアメリカンディアンの人々がいます。着る物すら満足に手に入りません。どうか、彼らに衣類を送ってください。」津田姉妹はこれに快く応じ、みかん箱10箱分の服を準備しました。ところが、これでは必要な量には足りませんでした。しかし、仮にもっとたくさんの服を集めても、今度は高い輸送代を負担することができません。これを聞いた当時のステーク部扶助協会会長会長の村上明美姉妹は、今年春「ステーク部全体で、行なったほうがもっと良いのでは」と考えました。

そこで、まず輸送手段の確保から始めました。最初に通産省に無料で貧しい国に送る制度について問い合わせました。その答えは「パナマのGNP(国民総生産)は基準よりも高いため、制度の適用はできません。」これを聞いて村上姉妹は、ねばり強くほかの団体を紹介してもらいましたが、そこでも断られました。それでも、彼女は「必ず見つかる」という確信をもって、さらに別の機関を調べていきました。約3カ月後杉山姉妹の紹介で、日本かつおまぐろ鯉 鮪 漁業協同組合連合会(日かつ連)

送られた救援物資は、パナマのサンミゲリートワード部の教会員(扶助協会の姉妹)によって配られた。右から2人目が杉山敦子姉妹。後方の男性と右端の女性はカルベス伝道部長ご夫妻。

から、村上姉妹に連絡が入りました。

「とても素晴らしいことだと思います。漁船が空いている時期なら無料で協力できますよ。」まさに確信どおりに輸送機関が見つかりました。

漁船の出港に間に合わせるためには、わずか2週間足らずで衣類を集めなければなりません。今年7月5日にステーク部内の5つのワード部(当時)に連絡をし、7月22日の午後6時までに出港先へ搬入しなければならないのです。各ワード部の扶助協会を中心に、あつと言う間に大小合わせて33箱の依頼が集まりました。

7月21日に、長老定員会の兄弟たちが箱詰めをし、箱の上に張るリストも急いで作りました。結局、すべての作業が終わったのは、夜の11時半過ぎでした。翌日、ふたりの兄弟が有給休暇を取って、港まで車で2往復し、無事に搬入できました。

これらの衣類は9月5日にパナマに入港、10日にパナマ大使館に到着しました。この間にも煩雑な税関の手続きなどが必要でしたが、そのほとんどすべてを日かつ連補給部の南伸明氏がしてくれました。南氏は「初めてのことでしたが、素晴らしい機会に立ち会う

ことができ、感謝しています」と語っています。

また、それぞれのワード部からも「皆が非常に関心を示してくれ、兄弟姉妹の愛を強く感じました。これからも、ぜひ奉仕する機会を広げていきたい」と、奉仕の喜びの声が寄せられています。

村上姉妹はこう述べています。「『私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうたことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それではなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである。』(1ニーフアイ3:7)困難にぶつかってもこの聖句を思い出し、それを成し遂げたときの様子を想像して働きます。善を行なうときにすべてが調和するのは、主が私たちの手を通してみこころを行なわれるからでしょう。」

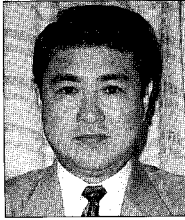
東京からパナマに住む貧しい人々に贈られたものは、衣類だけではなくありません。海を越えた所に住む同胞への愛とそれを実践する際に添えられた主の助けが一緒だったのです。(レポーター——溜衛浩之 東京南ステーク部ヤングシングルアダルト評議会会長)



家族の証

イエスを基として

東京北ステーク部
川越ワード部
澤恵悦



「クリスマスパーティーに招待されたの。」1990年12月のある日、妻が突然こう言って、私にも招待を受けた家族の家に行ってほしいと言いました。その数日前に、「今度教会に連れて行ってもらうの」という言葉を聞いていたことを思い出しました。大して気にも留めていませんでしたが、きょうはほくにまで出席してほしいなどと、そんなことを自分で勝手に決めてきてしまって、内心穏やかではありませんでした。気は重く、足取りも重くなるばかりでしたが、約束してしまったことなのでといって強引に連れて行かれました。

家に着いてみてびっくりしました。なんと高山家族とほかのひとを除いて、残りは皆外国人だったのです。背の高い外国人が皆、上から見下ろしてきました。出かける時、背広にするかどうか迷った末、ポロシャツにしたことが悔やまれました。「やっぱり背広にネクタイで来るべきだった。」ポロシャツ姿の自分は何となくその場にそぐわない気がしました。しかし話しているうちにそんな疎外感も消え、何とも言えない温かさを感じるようになりました。いろいろな人と会って話す機会はそれまでにいくらかでもありましたが、こんなに自分の話を真剣に聞いてくれる人に会ったことはありませんでした。宣教師や私たちを招待してくれたご家族の方々の愛に、私たちは感動していました。この気持ちは今でも変わっていません。

この日娘ふたりと妻は、宣教師から福音を学ぶ日の予約をしていたようです。妻が教会に行くのは反対はしませんでした。何にでも興味を示す妻ですから、そのうちにまた飽きるだろうとしか考えていませんでした。しかしその時は、自分がこのように信仰を持つなどとは考えてもみませんでした。

改宗するに当たり、私にとってとりわけ知恵の言葉は大きなチャレンジでした。それまでの生活を180度転換しなければなりません。仕事柄、どのようにして対応していったらよいか不安でした。最初は、なぜお酒を飲まないのか説明するのに、「健康のためにやめました」とか「車を運転するので飲めないんです」と言い訳をしていました。友達などは、酒をやめたと言っても、本気にしませんでした。けれども酒席では、一度飲み始めて話がはずんでくると、だれが飲んでだれが飲まないかなどは以外と気にならなくなるものです。仕事先でもだんだん「澤さんは、お酒を飲まない人」ということが定着してきたようです。

このように暮らしが少しずつ変わってきました。家庭の中で賛美歌が流れるようになりました。子供たちが弾いてくれる賛美歌を聞いていると、本当に幸福な気持ちになります。私はとりわけ85番の『神よ、また逢うまで』が大好きです。今自分で弾けるようになるため、指1本で練習しています。

何よりも大きな変化は、皆でイエス様を基とする生活が始まったことです。通勤のかばんの中に聖典が加わるようになりました。今1年間で少なくとも、モルモン経、聖書、教義と聖約は1回読み通すチャレンジを自分に課しています。

家族で教会に通うようになり、やっと1年がたちました。たくさんの人々に支えられ、励まされながらこの1年を過ごしてこられましたことに、心から感動しております。このように家族

一緒に改宗できましたことに、天のお父様のすばらしいみ業を考えずにはおられません。

家の中で子供たちの笑い声が私たちの心を豊かにし、子供たちの信仰が私たちの心を慰めてくれます。時には、けんかしてどうしようもないときや、妻とささいなことで気持ちが通じ合わないこともあります。そんなとき、娘が家の中で信仰箇条を一生懸命暗唱しているのを聞いていると、本当に心に平安を感じます。福音を学ぶ機会が与えられましたことに感謝しております。(さわ・けいえつ ワード部日曜学校会長会第二副会長)

福音がくれた 生きる勇気と希望

東京北ステーク部
川越ワード部
澤柳子



私たち家族は、埼玉県比企郡川島町という所に住んでおります。すぐ近くには越辺川という大きな川が流れ、景色は雄大で田舎育ちの私たちにとって、仕事から帰るとほっとする場所です。ここに私たち家族は移り住んで7年になります。家族は主人、中学校2年生の長男と長女、小学校4年生の次女、3歳になる次男と主人の母の7人です。

私たちは1991年3月10日、川越ワード部において家族5人でバプテスマを受けることができました。私たちが家族でこのように改宗できたのは、すぐ近くに住むあるご家族と、すばらしい宣教師に巡り会ったおかげです。このご家族の2番目の男の子と私の長

男の祐介は、小学校6年生の時同じクラスでした。社会の授業でキリスト教が日本へ伝わってきた時代のことを勉強していた時、担任の先生の「クリスチャンの人はいませんか」という質問に、その子が手を挙げたそうです。それを息子が家で話した時、私は絶対にその子のお母さんに教会へ連れて行ってもらおうと、強く心に思いました。

そのお母さんと私は、学校の役員会などでよく話す機会がありました。彼女はとても穏やかな人柄で、よく私を褒めてくれました。また彼女と一緒にいると気持ちが平安になりました。そんな彼女がクリスチャンであるを知ったのは、ちょうど私が再び教会へ行きたいと思い始めていた時期でした。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。生きるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、……。」(伝道3:1-2)すべてのことが成るには時期があるのです。彼女の日々の行ないが力強い伝道となつて、私たちを教会へ導いてくださったことに感謝しております。

私は19歳のころに独り暮らしを始め、初めて孤独というものを経験しました。その中でいろいろなことを考えました。なぜ人間は生きるのかという問題に悩み始めました。死ねば何もなくなってしまうのなら、生きる意味はないように思えました。どんなに楽しく過ごしても、むなしさや孤独感は消すことができませんでした。そのころから聖書を少しずつ読み始め、一度ある教会を訪ねたことがありました。でも今のように温かく迎えてくれる人もないまま、自然にその教会から遠ざかってしまいました。

問題は解決しないまま何年かが過ぎ、結婚、出産、育児、仕事へと現実的な問題を乗り越えるのに一生懸命でした。独り暮らしの孤独からは抜け出せましたが、満たされないむなしさからはまだ抜け出ることができませんでした。自分は一体何者なのかがわからなかったのです。

そんな折、天のお父様は私たち家族に特別な祝福をくださいました。もう一度自分を見つめなさいと、私が成長

できるように大きなチャレンジを与えてくださいました。主人の母と同居することになったのです。一緒に住むことにより、最初は相手にばかり目がいききました。言動の一つ一つが気になりました。毎日の生活で少しずつ気持ちが食い違い、家族がばらばらになり、暗くなってしまった時期もありました。

相手にばかり変わってほしいと思っていた私は、やがて自分の重大な過ちに気がつきました。相手に変わってほしいと思ってもそれは無理なことであつて、自分が変わらなければいけないと思いました。自分を見つめ、自分の弱さ、醜さと向かい合った時、私は神様の力が借りたいと思いました。神様の力で私は変わりたいと、そして心に救いが欲しい、平安な気持ちで暮らしたいと思いました。自分に与えられた現実を逃れることはできない。与えられた状況や周りの人々を受け入れ愛そう。不平ばかり言わず、解決できる方法を探そう。こう思いました。

福音を学び、神様に巡り会ったのは、そんな状態の時でした。何のために生きるのかと悩み始めてから、実に長い年月を経て、私はようやく人生の意義を見いだすことができました。

賛美歌85番『神よ、また逢うまで』を初めて聞いた時には涙が止まりませんでした。私たちは以前も神様と一緒に住んでいて、また神様のみもとへ帰り、会うことができるのです。本当に生きる勇気と希望がわいてきました。今ではもう、孤独になることも、むなしくなることもなくなりました。与えられた地上での生活を私たちは心を尽くして、精神を尽くして、一生懸命頑張らなくてはいけないと思いました。自分の背負っている様々な問題も、今では大いなる祝福と受け止めるようにしています。私を成長させるための愛だと思ふようにしています。

どんなに背負っている荷が重くても、それが私に与えられた祝福と思えたとき、その荷は少し軽くなるような気がします。今は毎日がとても充実しています。周りの状況は何も変わっていないのに、自分の置かれた境遇に、あまり不平はなくなりました。いつも感謝の気持ちが優先するようになりました。

いろいろなことに挑戦する勇気が出てきました。声を上げて、もう自分の正しさを主張しなくてもよくなりました。肩の力を抜くことができました。

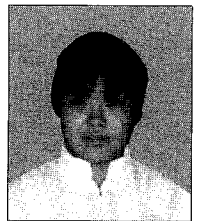
お父様がいつも見ていてくださると思えるとき、自分の役割を十分に果たそうと思います。与えられた自分の能力を少しでも高めようと頑張っています。これは信仰を持ったおかげだと思います。

ドアの外で静かにノックをしている神様に、私たち家族は静かに皆でドアを開け、改宗することができました。この福音に出会えたことに感謝しております。主人は40歳過ぎてからの改宗です。子供たちとも多少の波風はありましたが、5人でバプテスマを受けられました。主人の気持ちの柔軟さに感謝しています。家族を愛してくれていることに感謝しています。子供たちが父親に福音を伝えてくれました。宣教師が、家族で改宗できますようにと常に祈ってくださったことに感謝しております。

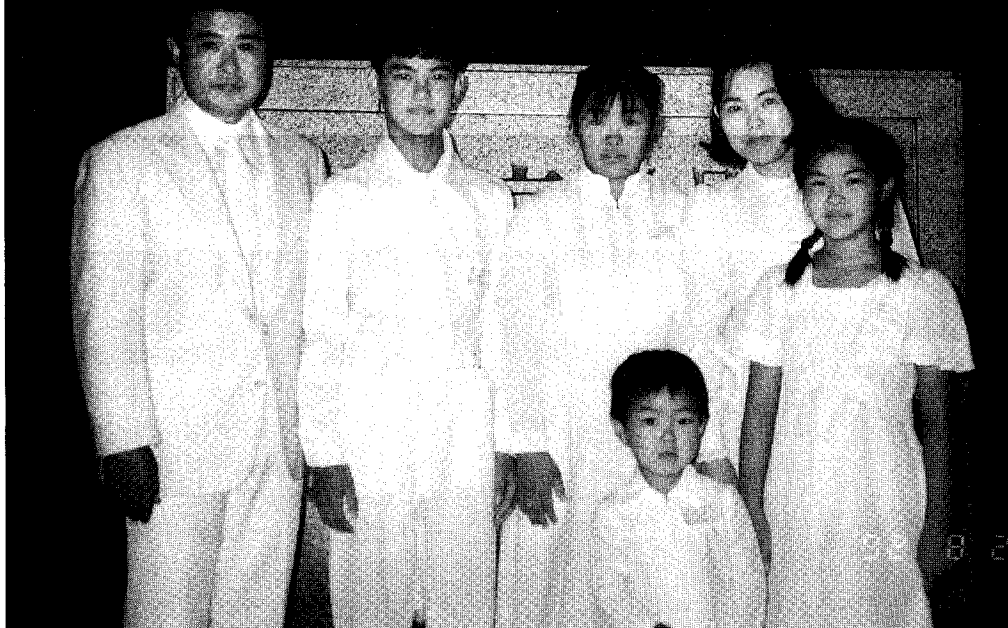
今は毎週教会に集えるのを楽しみにしています。清い生活をし、周囲の人々の光となるよう、私たち家族も少しずつ努力していこうと思います。(さわ・りゅうこ 初等協会教師)

天父とイエスを愛しています

東京北ステーク部
川越ワード部
澤友見



教会に私が初めて行ったのは、2年前のクリスマスの時でした。その後で宣教師から福音を学び始めました。お父さん、お母さん、また、兄弟4人の中にあつて、学校に通い部活動をするという生活の中で、私にとって「死」は無縁の存在でした。また、お父さん、お母さんの子供としてしか考えていない私の耳にとつ然入ってき



たのは、もうひとりの「天のお父様」の存在でした。そして、イエス様がどのような立場のお方なのか、学ぶことができました。

現在、私は、若い女性のピーハイブクラスで勉強しています。若い女性のテーマの中には、「私たちは天父の娘です。天父は私たちを愛し、私たちも天父を愛しています」とありますが、私は天のお父様もイエス様も愛しています。教会に入って変わったのは、朝、夜とも食事のお祈りをするようになったことです。また、教会に入る前よりも友達に親切にしたりするようになったことです。

今年8月、私たちは神殿に行き、親子の結び固めをしました。私は神殿へ行くのは初めてだったので、緊張しました。儀式はあっという間に終わってしまいましたが、それまでの準備が大変でした。3歳の弟は、「ぼくそんな白い服着たくない」と言って泣き出しました。時間がないので急いで着替えなくてはならず、ずずしい神殿の中で汗をかいてしまいました。親子の結び固めがどのような重大な意味があるのかは、私にはまだよく理解できませんが、それでもすばらしい経験でした。

あいかわらず学校へ行き、帰って来ると、同じことを繰り返す、また日曜日教会に行くという生活をしています。けれども今ではこのように福音を知っているのです、私がこれからいろいろな

困難にあっても、すばらしい力でささえられると思います。天のお父様や、イエス様が私を大切に思い、愛してくださっていることに感謝します。(さわ・ともみ ピーハイブクラス)

楽しかった 福いんの勉強

東京北ステキ部
川越ワード部
澤綾美



お 母さんにつれられて初めて、姉妹宣教師に会いました。私はその時宣教師とはどういう人なのか、知りませんでした。でも一緒に遊んでもらって、私はそれまでに感じたこともないような良い気持ちになりました。そして次に会う約束をして、会うのが楽しみになりました。

お母さんとお姉ちゃんと3人で教会の勉強を始め、最初の日に教えてもらったことは今でも覚えています。神様はどんな方なのか順番に言ってみようというものでした。白い洋服を着ていて、長いひげがあり、そして男性であるなどの答えが出ました。楽しい福い

んの勉強の始まりでした。イエス様がどのような方なのかそれも学びました。私たちが天のお父様のもとに帰るのには、ふたつの大きな障害があり、それが罪と死です。そのためにイエス様がかけ橋になってくれたことを、教えてもらいました。

福いんの勉強が終わって、バプテスマの日がやってきました。後から福いんを学び始めたお兄ちゃんやお父さんも、一しょにバプテスマを受けることが決まりました。私はバプテスマの時の証で、すぐきんちょうしました。皆がよころんでむかえてくれて、お母さんは泣いていました。毎週教会へ通うのは、朝起きるのがちょっと大へんですが、教会から帰って来ると気持ちが悪くなります。

現在私は初等協会の勇者Bクラスで勉強しています。先日初等協会のせいさん会の発表があり、けいけんな態度というテーマで「私はせいさんの間天父とイエス様を身近に感じます」と発表しました。お祈りや発表や意見を言ったりするのはきんちょうして大へんですが、少しずつなれたと思います。天のお父様が私をこんなに大切にしてくれることを知ったので、私もまわりの人のことを大切にしようと思います。そして私もすばらしい宣教師になれるよう、天のお父様にお祈りしています。(さわ・あやみ 勇者クラス)

10月に召された専任宣教師

第160期生 11人



後列左から1-7, 前列左から8-11

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 酒井朋子	東京東S/長生W	神戸伝道部
2. 石垣和恵	仙台S/長町W	東京北伝道部
3. 河野紀子	福岡S/福岡W	神戸伝道部
4. 玉城香愛	沖縄那覇S/那覇W	大阪伝道部
5. 福原紀子	岡山M/松山D/松山B	東京南伝道部
6. 富澤真佐美	横浜S/横浜第1W	沖縄伝道部
7. 佐藤美枝子	札幌西S/藻岩W	沖縄伝道部
8. 西村栄治	神戸S/神戸W	東京南伝道部
9. 大沼覚	仙台S/石巻B	東京北伝道部
10. 趙顯前	東京東S/北千住W	神戸伝道部
11. 佐藤浩二	横浜S/大船W	名古屋伝道部

S:ステーク部, M:伝道部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

編集室から

皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先

(電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名に併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先: 〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(5489)9251
ファクシミリ03(5489)9254

地区代表の異動

浅間玄也長老が解任され、新たに湯沼誠二長老, Gary Steven Matsuda 長老が地区代表として召されました。それに伴い、担当地区が以下のように変更になりました。

湯沼誠二長老——札幌, 仙台, 東京北地区。新山靖雄長老——高崎, 東京地区。田中靖也長老——静岡, 名古屋, 大阪地区。Gary Steven Matsuda 長老——京都地区。青柳弘一長老——広島, 福岡, 沖縄地区。

役員の内命

1992年9月18日から9月29日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 名古屋西ステーク部一宮ワード部
新監督: 白木守
(前任者: 松井利幸)
- 大阪堺ステーク部羽曳野ワード部
新監督: 前川浩三
(前任者: 伊藤猛)

新ユニット

- 我孫子ステーク部我孫子支部
支部長: 三輪秀世
(1992年9月13日, 牛久ワード部, 神戸ワード部より分割)

おわび

本誌10月号の記事『理解の目を開いて』(p.48)の中に、ダウン症について不適切な表現がありました。

元来、ダウン症は知的な面での障害であり、本文中「精神的に障害がある」との表現は不適切でした。読者の方々にご迷惑をおかけしましたことをおわび申し上げます。